

2

0

1

3

KIT同窓会誌

平成25年 No.7



京都工芸繊維大学同窓会

目次

■ 会 告	1
■ ご 挨拶	2
三好 明 本城博一 古山正雄 蔭山 薫 森迫清貴 松野謙一	
■ 退職教員挨拶	6
伊藤 孝 尾江邦重 岡田康郎 木村良晴 酒井謙一 高橋雅興 福田民郎 森田孝夫	
■ 寄 稿	10
母校大学に寄贈二件	
■ KIT 同窓会 定期総会及び懇親会報告	11
■ 支部・部会の承認	14
支部・部会 KIT 関東支部 facebook ページ 京工大機織会(マコーン会)について KIT 同窓会東海支部発足!	
■ 平成24年度 KIT 同窓会 教育支援事業	18
■ 寄 稿	19
洛西育ちの大阪人 衣笠祿栄会 平清盛の京を歩く例会 卒業後の思い出、新制大学1回卒業生から 私の作品「ツインアーチ138」 「世界のサカタ」に賛辞を!? 私が絵描きになった切掛け! 我が世話焼き人生 われら0170会(松機会) 豊かな環境の次世代への継承に向けて 人間 本野精吾教授Ⅱ ― 真美会でもデザイン力を発揮 拝啓、同窓会員様 Enjoy! 卒業後の動き 新しい分野との出会いそして今	
■ グローバルエンジニア育成のための海外インターンシッププログラム 推進事業参加体験記	28
イギリス留学で学んだこと Vietnam internship ベトナムでのインターンシップ 海外インターンシップ体験記	
■ 東日本大震災復興支援プロジェクト報告	30
■ ベンチャーラボラトリー講演会・成果発表会報告	30
■ 衣笠同窓会 講演会開催報告	31
■ 衣笠同窓会だより	31
■ 大学だより	32
美術工芸資料館の活動 第10回全日本学生フォーミュラ大会優勝報告	
■ 課外活動	36
ギター部 交響楽団 漫画研究会 ボランティアサークル 剣道部 ソフトテニス部 バドミントン部 ワンダーフォーゲル部	
■ 会員の受賞	38
■ 教員の受賞	38
■ 教員の異動	38
■ 平成24年度 博士学位取得者と学位論文題名	39
■ 卒業生・修了生の就職先・進学先	41
■ 訃報・物故会員 (KIT同窓会誌をご覧ください)	43
■ 年会費等の納入について	44
■ お知らせ	51
KIT 国際学術交流クラブご案内 東海支部主催行事参加のお願い KIT ゴルフ会コンペ開催と会員募集 卒業証明書等の申し込みについて	
■ 編集委員	52
■ 表紙デザインについて	
■ 松ヶ崎キャンパス建物配置図	

■ 会 告

平成25年度の総会を、下記のとおり開催します。会員諸兄姉の多数のご参集をお願いします。
同窓生はじめ、クラブ・同好会など関係者お誘い合せのうえ、多数のご参加をお待ちしています。

記

○ 京都工芸繊維大学同窓会 平成25年度定期総会

日 時 平成25年6月29日(土) 午後4時から

場 所 ウェスティン都ホテル京都 西館 3階 「比叡の間」
京都市東山区三条蹴上 電話075-771-7111

議 案 1. 人事
2. 平成24年度事業報告
3. 平成24年度決算報告
4. 平成24年度会計監査報告
5. 平成25年度事業計画(案)
6. 平成25年度予算(案)
7. その他

報告事項 理事会報告

○ 京都工芸繊維大学同窓会恒例の懇親会を下記により開催します。

記

日 時 平成25年6月29日(土) 午後6時から

場 所 ウェスティン都ホテル京都 西館 2階 「愛宕の間」

会 費 10,000円(ただし、学生会員は3,000円を当日受付にてお支払いください。)

〈参加申込みについて〉

総会、懇親会への多数の参加をお待ちしております。

参加される方は、別添郵便はがき(会員データ記入票の下部)の「出席」に○印をお付けの上、6月14日(金)までに必着するように投函をお願いします。直接同窓会事務局にFAX又はメールによりご連絡下さっても結構です。

なお、本年3月に工芸科学部を卒業された方は懇親会に無料で招待いたします。(先着50名まで)参加される方は、卒業課程、氏名、連絡先を明記のうえFAX又はメールにより同窓会事務局へご連絡下さい。

会長就任のご挨拶 4つの委員会の創設で同窓会の基盤を創る



京都工芸繊維大学同窓会
会長 三好 明
(繊維化学科 昭和31年卒)

私は皆様のご推挙を頂き、平成24年6月よりKIT 同窓会2代目の会長の任に就くことになりました。皆様と共に、発足間もないKIT 同窓会の基盤創りのため、全力投球する所存です。ご指導ご鞭撻の程よろしくお願い申し上げます。

1. KIT 同窓会の進む方途

平成24年は3同窓会が統合してから3年目になります。同窓会も長期的視野で方向を明確にしておくことが必要です。21世紀において、日本は大幅な人口減が予想されており、大学淘汰の時代が続くといわれています。このような時代背景のもとでは、同窓会は会員への福祉事業と大学支援の二つの目的を同時に果たす道を選択することが必要です。つまり、会員への福祉事業で資金を得て、これを大学支援に回すフローができないかということです。それにはまず、KIT 同窓会は、自主的に「運営」から「経営」へ意識をシフトする必要があります。

2. 4つの委員会の創設

上記のガバナンスを確立するためには、今まで年に3回レベルの理事会で運営するシステムを変えなければなりません。長期的視野の基に、理事、会員、総務委員が一体となって、次に示す4つの基本的問題について、理念や施策、その実施を検討してまいります。各アイテムについて副会長を委員長とする委員会制度をとり、理念、施策を共有し、工程表のもとにスピーディに実行、実績を挙げていく体制をとりました。

- (1) 支部会活動の活性化
- (2) 大学教育研究の支援充実・年会費納入率アップ
- (3) 会誌の広報宣伝力の向上・講演会の開催
- (4) 新事業の調査・創設

各課題についてご説明します。(1)京都工大会、衣笠同窓会、KIT 同窓会の統合に伴い、地域支部、部会も統合することが要諦となっています。地域支部は地域の歴史や考え方を尊重して進めます。支部、部会は同窓会活動の基盤です。(2)年会費の納入率が高くなると、大学への支援が潤沢になります。高納入率となる施策

を求めていきます。(3)会誌を通じてより戦略的広報を策定、実行します。(4)日本が成熟期に入った環境変化に対応して、新しいコミュニティビジネスを創造しようという課題です。同窓生の再就職援助や定年退職後の会員がコミュニティビジネスを創設するシステムをつくる等の同窓生への福祉活動は、同窓会として重要な活動です。同窓生には優れた有資格者、スペシャリストやジェネラリストがおられます。つまり同窓会会員の価値ある無形資産を活用し、同窓会に利益体質を装備できないかという課題です。困難な課題ですが果敢に挑戦しましょう。

理事に対し4つの委員会への参画を求めたところ約30名のご参画を頂き、各委員会において前向きな議論が活発に始まりました。同窓会のシンクタンクの充実のために、今後とも理事、会員の方々の参画をお願い致します。

3. 国際インターンシップとグランデルフィーノへの支援

国際インターンシップは、これからの日本経済再生にとって大学院生の必須体験であります。この制度を維持するために、大学に平成24年度、25年度で計1千万円、大学寄付基金として寄付を致しました。また自動車技術会主催の全日本学生フォーミュラ大会で、わがグランデルフィーノが一昨年の12位から1位に輝きました。No.1の快挙と組織努力に、百万円を寄付をさせて頂きました。

4. 支部会の誕生・支部会の活動

平成24年度、理事会において関東支部、東海支部、浜松工繊会の地域支部、衣笠同窓会、松ヶ崎デザイン会、京工大機織会(マコーン会)、色染物質会、KIT ゴルフ会の部会が承認されました。衣笠同窓会は母校と京都原糸商協同組合と共催で、「次世代型繊維への挑戦」と題した講演会を開催、多くの反響がありました。

KIT 同窓会を、総力を挙げてスモールバットエクセレントな組織に変革していきましょう。

KIT 同窓会長退任のご挨拶

京都工芸繊維大学同窓会
顧問 **本城 博一**
(建築科 昭和23年卒)



京都工芸繊維大学(KIT)同窓会の皆様におかれましては、益々ご清祥のこととお慶び申し上げます。平素はKIT同窓会の運営、充実、発展につきまして、ご支援、ご鞭撻を賜りまして厚くお礼申し上げます。

さて、私事で誠に恐縮でございますが、昨年の6月開催の本同窓会定期総会において会長を任期満了により退任致しました。

平成18年4月京都工芸繊維大学が大学の教育研究組織の大改革以来、平成22年に初めて工芸科学部の第1期生を会員としてお迎えする年に、会長という大任を拝命してから2年の歳月が流れました。その間、この大任を大過なく無事に果すことができたのも、江島前学長の温かいご指導とご高配を始めとし、母校での多忙な本務に加えて、総務委員を兼任していただいた先生方のご協力、同窓生諸兄の献身的なご協力、そして、事務局の大切な業務を大学当局のご好意によりKITビューローの皆様方の心暖まるお力添えによる応援の賜物であり、退任にあたりまして深甚なる感謝を表する次第です。

今、退任にあたり2年間を顧みますと、何と申しましても本学に京都工大会と衣笠同窓会の二つの同窓会が存在することでした。これまで、両同窓会で一本化に向けて度々話し合いが持たれましたが意見の一致を見ず、まさに暗礁に乗り上げた状態でした。このニュースをいち早く江島前学長が聞かれ持前の説得力と行動力を駆使され両者への適切な指導、助言により一本化への道筋を切り開いていただきました。江島前学長はKIT同窓会の生みの親でもありました。これは、京都工芸繊維大学同窓会史上、歴史に残る大改革でございました。

次に、我々同窓会にとって待望久しかった同窓会館が、本学創立60周年の記念事業として大学当局の絶大なるご支援とご協力、そして同窓会会員諸兄の温かい懇志により見事に完成したことです。今やKIT同窓会では、ここを拠点として活発な同窓会活動を展開しています。また、大学と同窓会の共催で先年「京都工芸繊維大学 教育研究地域交流会」を実施し、江島前学長を先頭に大学当局、同窓会幹部が地域同窓会支部を訪問し、意見交換、情報交換、交流、

親睦に努め地域支部との交流に成果を修めることができました。今後の継続を期待致します。

そして、一昨年の秋KIT同窓会の学術記念講演会に元大蔵大臣の武村正義氏を講師にお招きし「この国はどこへ行くのか」という演題でお話を承りました。「大海にさまよえる日本はどこへ行くのか」「今後の日本丸の舵取りは、誰がどう取るのか」「果してどのような方策があるのか」大変興味深く示唆に富んだお話でした。

爾来、時は流れ、この度の衆議院選挙では、この「大海にさまよえる日本丸」の舵取り役が、民主党から自民党に変わりました。この日本丸には、景気浮揚、原発、消費税、外交等数々の難題、難問が山積みされています。果して日本丸の前途は大丈夫でしょうか。国民の多くの人々は期待と不安の交錯する新年の幕開けではなかったでしょうか。

このような、社会情勢の変化の中で、昨年京都工芸繊維大学でも工織丸の舵取り役が、抜群のリーダーシップにより数々の功績を残していただいた江島前学長から新進気鋭の古山新学長へと実に見事なバトンタッチが成し遂げられました。我が工織丸の行手には何の迷いもありません。ゴーイングマイウエーです。

平成25年新春の集いで古山新学長のご挨拶では、平成25年度京都工芸繊維大学改造計画～KIT主義の確立～と題して今後の大学の進むべき指針について詳細に巨り力強い方針を述べられました。本学の前途は洋々です。

千年の都、京都は貴重な文化遺産の宝庫であり、この地には先人によって育かれ、現在まで大切に伝承された伝統工芸がございます。この古都に最も相応しく、一味違う大学として京都工芸繊維大学が未来に向けて「キラリ」と光り輝く大学として、益々飛躍し発展することを祈念致します。

最後に、会長退任にあたりまして今後は会員の一員として甚だ微力ではございますが、KIT同窓会の発展のためご支援申し上げることをお約束し退任のご挨拶と致します。まことにありがとうございました。

松ヶ崎から世界を目指して

京都工芸繊維大学

学長 古山 正雄



過ぎたこととは言え、昨年はひどい年でした。国立大学に対する風当たりは厳しく、運営費交付金の振り込み時期が遅れるなど、財政的に異常な事態が続ぎ、大学は素直に教育研究活動が展開できない年となりました。こうした厳しい状況下でも、大変嬉しい出来事がありました。めでたい出来事は、皆様方とともにその喜びを分かちあいたいと思います。

一つ目は、2012年度、第10回全日本学生フォーミュラー大会において、京都工芸繊維大学チームが総合優勝の栄誉に輝いたことです。学長としてこれほど嬉しいことはありません。最低の環境から最高の成果を生み出した学生諸君を誇りに思います。苦節7年、知恵と工夫によって財源難を克服し、貧乏な小規模校でもやればできることを日本中に示したのです。この成果は、参加した学生だけでなく、京都工芸繊維大学の教育活動全体に自信と活気をもたらしました。同級生や他分野の学生諸君の刺激にただでなく、教員スタッフ一同にも自信とやる気をもたらしました。我々の教育方針、モノづくり教育の方法、実践的な工学教育の素晴らしさが実証されたのです。これこそ最高のFD効果です。学生の技術力、基礎力、応用力、対外折衝力、プレゼンテーション能力などの指標に関して、国公私を含めた全大学中、総一位となったことは、いくら強調しても強調し過ぎることはありません。指導して頂いた教員、支えてくれた事務局スタッフ、ご支援をいただいた企業の皆様方には心から感謝申し上げる次第です。

二つ目は、本学卒業生ダワージャブ・ガンホヤグ氏が昨年、モンゴル国鉱業大臣に就任されたことです。モンゴルにおいても、日本にとっても大変めでたいことです。現在は重要な役職にあるため超多忙ですが、日本への訪問の機会を調整中であり、京都工芸繊維大学から名誉博士の称号を授与する計画です。

三つ目は、応用生物学部門の森肇教授が、財団法人大日本蚕糸会より「貞明皇后記念蚕糸科学賞」を受賞されたことです。森教授の研究は、

蚕を用いた先端バイオの研究です。本学の起源とともに始まった蚕の研究が、120年の歴史を貫き、今日の最先端バイオ研究の成果を生み出したのです。このナノテク材料の生成・分析法が、歴史と伝統を誇る大日本蚕糸会において顕彰されたことは大変意義深いと考えます。

京都工芸繊維大学は、知と美と技の融合を目指して、教育研究活動を展開しています。学長裁量経費により、フォーミュラーカーやロボコン競技会、ミラノサローネ展示会への参加を支援してきました。MITで開催されるiGEMという国際遺伝子改変マシンコンテストでは、応用生物の学生とデザインの学生が共同チームを組んで蛍光たんぱくを用いたサインペインによる作品を発表し、好評を博しました。またスタンフォード大学が主催するモノづくり競技会ME310では、フィンランドの学生と共同チームを組んで、赤ちゃんが生まれたときのプレゼントとして、当初はゆりかごとして使いつつ、後々は勉強机にも変身できるコンパクトな衣装カゴをデザインして好評を得ています。このように、最近では実物を試作して、国際的なコンペの場で競い合うプログラムが隆盛です。さらに企業インターンシップを通じて現場感覚を身につけることが大切です。我々も、産学連携研究に加えて、産学連携教育への展開を目指しています。

今年度、京都工芸繊維大学は、京都府や京都市との連携事業を推進していく計画です。本学に対する経済四団体からの期待も高まる中、我々も街なかに出て、あるいは京都府の振興策にも寄与できるように、キャンパスからはみ出した大きな絵を描こうとしています。企業との連携教育においても、日本国内にとどまらず海外での企業インターンシップ、海外協定大学とのジョイント・ワークショップが大切です。有り難いことに、昨秋、同窓会から寄付を頂きました。これを契機に、我々の教育研究の舞台を京都市から京都府下へ、そして世界へと拡げていきたいと思っています。乞うご期待！どうかよろしくお願い致します。

就任ご挨拶

京都工芸繊維大学同窓会
副会長

蔭山 薫
(養蚕科 昭和39年卒)



このたび三好会長のご指名を受けまして、何分経験不足ではございますが、副会長に就任いたしました。皆様方のご援助を得ながら会長を補佐し、会の充実・発展のために努めてまいりますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

養蚕学科3回生の折に、当時の先生方から幅広く一般的な自然科学に関する本(岩波新書版の科学の方法、雪、アユの話など)を読んで、短い文章でその書評を書く特訓をよく受けました。このことで自然探求のおもしろさを実感し、また4回生そして専攻科の2年間で専門的な実験・研究を経験するとともに、高等学校講師を引き受けた事がきっかけとなり教育関係の道に入ることになりました。

生涯の前半は高等学校現場で、そして後半は主に京都市教育委員会にて教職員研修・高等学校指導と人事・教育行政に携わってきました。当時の京都市の教育委員会は一般市民から「不夜城」と呼ばれるほど連日夜を徹しての改革・改革で猛烈な仕事ぶりでありました。

65歳であらゆる職を辞し、残る人生は人との交わりもできるだけ控えて、静かでのんびりした日々を送るつもりでおりました。そうした折に三好会長から副会長への依頼があり、当初はお引き受けすべきかどうか随分迷いましたが、お人柄も良く意欲的・積極的な会長であることそして現在の私があるのは京都工芸繊維大学で学べたことであることを考えて、最終的に引き受けすることにいたしました。

現在の大学は新しい時代のニーズにこたえて改組再編され、学科・施設とも昔とは見違えるほどのすばらしいものとなりました。加えて学内で見かける学生は今も昔と変わらず誠実・勤勉さが溢れ出ており、また熱心な学生思いの教授陣に恵まれて、いつまでも伝統が守られていることは大変喜ばしいことでもあります。

京都工大会・衣笠同窓会の会員と若々しい現大学の卒業生とが一体となってきたこの同窓会は専門と世代を超えて交流を重ねることにより、近い将来多彩で活力あるすばらしい同窓会になるものと思われまふ。

そのために微力ではありますが、少しでもお役に立つことができればこの上もない喜びであります。今後ともよろしくお願ひ申し上げます。

大事な時期に副学長を拜命して

京都工芸繊維大学
理事・副学長

森迫 清貴
(建築工芸学科 昭和51年卒)



昨年4月に古山学長から法人理事・副学長に指名されました。国立大学法人第2期の極めて重要な時期に、本学の行く末について責任の一端を担うことになり、4月以降小生の能力を明らかに超えている業務の数々に対しとにかく頑張らなければならない状況に挑戦し続けています。

やがて1年になりますが、この間国立大学法人、特に本学のような小規模大学法人の置かれた立場の厳しさを痛感しています。本学は、運営費交付金というかたちの税金によって過半の経費が賄われており、法人という独立性が真に発揮しにくい状況にあることも痛切に感じさせられています。

しかしながら本学は、京都という世界中に知られた場所にあり、かつ開学以来わが国の良質な理工系技術者の育成を行ってきています。改めて京都工芸繊維大学に誇りを持ち、本学の良さを、今以上に内外にアピールしていきたいと思っています。本学は、繊維をはじめとして、様々な分野で、これからもわが国にとって重要な役割を果たしていかなければならないと思います。

そのためには同窓生、在学生、教職員はもちろんのこと、本学のすべての関係者の皆様に、「京都工芸繊維大学」という大学を大事に思っただけで、大学のポテンシャルを高めることへの何らかの貢献を、心よりお願ひしたいと存じます。

前記しましたように、小生の能力ではなかなか難しいところも多々あります。また小生には気負いが勝ちすぎて、物事を進める際の丁寧さに欠けるきらいがあります。同窓生をはじめとする学内外の皆様には、小生の仕事ぶりに、歯がゆく、かつ、いろいろご不満が溜まることもあるかと存じます。どうか皆様の的確なご助言をお寄せ下さい。

よろしくお願ひします。

研究科長・学部長に就任して

研究科長・工芸科学部長
松野 謙一
(機械工学科 昭和48年卒)



毎年5月の連休の頃になると構内のあちこちでツツジの花が咲き学内を赤く染めます。ツツジの花を見ると、四十年前このキャンパスで勉学に励んだ学生時代を思い出します。時代に左右されない工学の基礎的な部分をしっかりと身に付けた学生を送り出し社会に貢献するという本学の教育方針は変わることなく受け継がれて、社会から卒業生に対する高い評価をいただいております。昨年4月に研究科長(学部長兼任)に就任しましたが、この教育方針を変えることなく維持したいと願っております。大学の発展を願い、生命物質科学、設計工学、造形科学および基盤科学の4学系長と連携を取って学部および研究科の運営にあたっております。国家予算の中で1兆円を超える規模の数少ない項目の一つに国立大学運営交付金があります。この予算に対し国民から厳しい目を向けられており、その重要性を示すべく現在各国立大学に対しミッションの再定義が求められています。本学は、建学以来の「工芸」「繊維」を軸に時代の要請に対応しながらソフトテクノロジーとしての「工芸科学」(福井謙一元学長)へと発展し現在に至っています。本学は、京都に根差した特色のある工学系大学として受け入れられているものと考えています。我々は、さらに発展すべく改革を推し進めていかなければなりません。旧国立二期校の時代と比べ、前期日程入試重視に変わり、学生の愛校心も随分変わったように感じます。また、最近では「工芸」を冠した大学も幾つか新設され、絶滅危惧種とも言われた「繊維」も最先端技術として見直す動きもあり、「工芸繊維」のイメージも社会的に変化しております。これを好機と捉え、京都工芸繊維大学の残念ながら高いとも言えない全国的知名度を向上させ、KITのブランドイメージを構築したいと考えています。在校生も学生フォーミュラで全国優勝するなど頑張っています。同窓会諸氏のご協力をお願いいたします。

退職教員挨拶

まなびやの未来に

伊藤 孝
(高分子機能工学部門)



約37年間に及ぶ教員生活を、この3月で終えることにいたします。

以前勤務していた大学は実用的な研究を重視する雰囲気が高く、違和感を覚えながら勤めていた記憶があります。今で言うところの「外部資金」を結構獲得していたのですが、研究に関しての充足感はあまり味わえませんでした。

本学の繊維学部へ赴任したときの第一印象は職場の温かさでした。当時の繊維学部は、基礎的な科学研究を尊重する精神が色濃く残っていたように思います。そのおかげで自分なりに納得できる研究生生活を、本学で30年近く続けさせていただいたことに深く感謝しています。

一方、教育においては、我が理想にはなかなか近づけませんでした。先日、研究室の卒業生名簿に目を通したところ、学生を怒ったことが何回かあることを思い出しました。若い頃に偏在していますが、すべて覚えています。今考えてみると、怒らなくても指導できたと思います。休講も2回しました。補講したにせよ、学生の方々に迷惑をかけたことは確かです。ただ、初心を貫徹したこともあります。例えば、他大学の非常勤講師は一度も引き受けませんでした。本学学生の教育に全力を尽くしたことは誇りに思っています。

最近気になっているのは、教育機関で多発しているハラスメント事件です。中学、高校の、いわゆる「指導死」が世間を騒がせていますが、現況を鑑みると、大学でも類似の事件が起こる可能性があります。

私は、ある時期から、己に対して次のように言い聞かせてきました。「怒るより叱れ、叱るより諭せ」です。最近になって、それに続く言葉に辿り着きました。「聴け」です。まずは学生の言葉にとことん耳を傾けて相手の心情を酌むことが、学生を指導する出発点であるということが、ようやく実感として理解できてきました。

本学が、学生にとって安心して心楽しく過ごせる学舎として成長していくことを、心より願っております。長い間、本当にお世話になりました。

ハッピー リタイヤメント



尾江 邦重

(電子システム工学部門)

1998年4月に奉職して以来、14年5ヶ月にわたり本学では大変お世話になり、有難うございました。日本は、私の幼少の頃から欧米になんとか追いつき追い越そうと必死の努力をし、経済的、産業的には肩を並べるまでになりました。しかし、豊かになったわりに生活を楽しんでいない状況かと思えます。「ハッピー リタイヤメント」は私の長年の目標でした。これから人生を楽しむことが出来ることを大変うれしく思っています。今後は、ヒマラヤやヨーロッパアルプス、また国内でのトレッキング、そのためのスポーツクラブでの体作り、頭の劣化を防ぐためのピアノレッスンや英語のスピーチ等々、充実した人生を歩みたいと思えます。

私が従事していた電子工学分野は、長い間日本の産業を支える花形でした。鉄鋼、自動車産業と共に、多くの外貨を獲得し、日本が食料、石油等を輸入して豊かな生活を送ることが出来る原資を獲得してきました。このような中で、産業界において思う存分研究費を使い、世界をリードする最先端の研究が出来ましたことは大変幸運であったと思えます。本学に奉職した頃から、デジタル化で世界の誰でも普及品を作れるようになり、また円高の影響もあって、国内電子産業は苦難の時期にあります。日本の電子産業界が絶好調で、米国電子産業界が大変な苦境にあった1980年代後半に、シリコンバレーを中心とする米国の大学が、今日花開いているデジタル技術を生み出し、米国の繁栄を再構築してきた事実を考えると、国民に対する大学の使命がきわめて重要であることは明らかです。後に残る皆さんに強いエールをお送りし、ご活躍を祈念いたします。

PS：写真はヒマラヤ・アンナプルナハイキング中、日の出のプーンヒル(3194m：有名な展望台)にて

退職挨拶



岡田 康郎

(建築造形学部門)

いかにも地味ながら、“漂えど沈まず”様に39年の世を尽くしたつもりであります。先輩方の驚愕の表情が浮かびます。“この人、下鴨のデルタ地帯から外へ出たことがないんだと！”ほんとうに、天然非記念物がふさわしい牛の歩みで今、やっと田からあがる期を迎えました。同期の皆は卒業後40年を越え、学生時代を振り返るに及ぶや、議論好きの癖か、なぜか、Petit Prince についてのうんちくにmailが沸きかえています。学生時代、皆が敬愛する阿部先生が、“apprivoiser”を“縁”と訳されたということが話題となっています。建築学生はフランス語が必修と考えられた時代ですので、なんと格調の高い！劣等生は一人蚊帳の外に弾かれるしかありません。彼らの巧みな解説をいただくと、日本語には該当語がなく、意味としては“よき仲を築こうと意思すること”のようです。キツネがプチ・プランスに言います、“絆みたいなものだ”。

建築環境工学を専門分野としてきましたが、そのはじまりは、吹雪の中唐突に現われたバスに考えずに飛び乗ったようなものでした。“大切なもの(肝心なもの)は眼には見えない”という無明のとき、“縁”が飛来したわけです。同期30名中、建築設計からエンジニアリング系に舵をきったのは私一人きりでした。劣勢の中、節を折らずに來れたのはやはり、“apprivoiser”のお蔭だと気付かされます。いま、この語には“飼いならず”というショッキングな訳語が充てられていますが、付随する上下の感覚が仏単語には薄いようです。助手になりたてのころ、教室全体を満たす空気の平等生、公平性、透明性のおかげで孤立から救われました。“設計”が金看板でありながら、実に風の通りはよく、専門主義は影を潜めていました。どうか皆様には、受動的ではなく、積極的に働きかけてよき仲を築き、爽やかな環境を作って頂きますよう切にお願いして退くこととさせていただきます。長い間、ありがとうございました。

「論文のための論文」と 「学術成果としての論文」

木村良晴

(バイオベースマテリアル学部門)



この3月に“無事”に定年を迎え、めでたしの心境であるが、年次進行中のバイオベースマテリアル学専攻の完成を見るまで、向こう2年間は特任教授として「居残る」こととなった。特任教授への就任に際して私の資格審査を研究科教授会でするそうで、業績資料の提出を求められた。自らの業績資料の作成は、過去の著作物を遡る難儀を除くと、過去の研究活動を振り返るいい機会になった。一つ一つの論文には思い出があり、全体として精一杯やったという満足感を覚えたと言いたいところであるが、それは少し言いすぎのところがある。特に、90年代には、自分の意に沿った論文が書けず、苦い思いを募らせていた。それは博士課程の設置に伴い、社会人に論博や課程博士をとっていただくために書いた「論文のための論文」が多かったことに起因している。後者の論文は、自らの研究論文の作成に費やすべき限られた時間を使って書いていたものであり、その論文作成が何年も続くと、自分の研究論文はもう書けないと諦めの境地にまで陥ったのである。しかし、博士の学位を取得された方々のその後の活躍を見ていて、これも仕事だと心温まる思いになったのも事実である。2000年代に入り、ようやく自分の研究論文に時間がさけるようになった矢先に、地域共同研究センター長を拜命し、産学連携のリード役をすることになった。再び、時間的余裕を失った中で、論文にできなかった研究が多くあり慙愧に堪えないが、論文にできた研究もある程度あるのではないかと自らを慰めている。

「論文のための論文」、ある程度評価された「自らの学術研究論文」、実用化のレベルにまで到達した研究成果、多くの国際学会での招待講演、啓蒙的な総説、いずれもそれなりの意味があった。どんな目的であれ、どのレベルの研究であれ、真摯に対応するのが大学人の勤めであったと、自らに言い聞かせているところである。

定年退職にあたって

酒井謙一

(言語・文化部門)



1985年に繊維学部に着任して以来、28年もこの大学でお世話になりました。本学に来て、まず驚いたのは、案外(失礼!)できるということでした。最初の年、高分子の1クラスには、前任校と同じ教科書で同一の学期末試験を行いました(不精!)が、平均80%弱でした。京都で学生時代を過ごしたのですが、この大学のことをよく知らなかった私にとっては大きな驚きでした。

大綱化のあと、一時期応用生物学科に所属し、8名ほど卒業研究のお世話をしました。専門外の自分でいいのかと思いましたが、テーマが決まり、スイッチが入ると、ほっておいてもいろいろな本や資料にあたって結果を出してくれました。改めて潜在能力の高さを実感しました。ただその発表ではこちらがうかつなミスをしたこともありました。スーツ着用が常識なのでしょうが、最初の学生にはうかつにも指示しなかったため、ジーンズのジャンパーに赤いセーターのような服装で発表することになってしまいました。

こんなうかつな私がなんとかやってこれしたのも、皆様方のおかげだと思いますが、振り返ってみると、やはり人文教室のメンバーだった先生方には特にお世話になったのではないかと思います。人文事務室には、少し時間があると、歴史学、教育学から生物学にいたる先生方が集まって、ご専門のお話から幅広い教養に裏打ちされた雑談にいたるまで、いろいろな面白いお話が聞けました。浅学菲才のこの私がなんとかそれなりの成果をあげられましたのも、いま思い出しても楽しいこの耳学問のおかげだったのではないかと思います。本学の学生さんたちにも、やがて大きくものが見えるようになる、こういうお話が聞ける場が与えられることを願ってやみません。

最後に、本学の発展を願って筆をおきたいと思えます。お世話になりました。

退職にあたって



高橋 雅興
(高分子機能工学部門)

1995年10月に本学に来てから17年余りが過ぎました。その間、大変お世話になった高分子機能工学部門の先生方、いろいろな機会にお世話になり、またご教示いただいた本学の多くの先生方に心より御礼申し上げます。また、あらゆる機会に丁寧にいただいた事務方の皆様方に厚く御礼申し上げます。私のメールアドレスのmdtの由来(遅い、どんくさいのd)にも関わらず、温かく接していただいた皆様方にお詫び申し上げますと共に、厚く御礼申し上げます。

思いつくままに本学での思い出を述べさせていただきます。本学の学生さんの長所がまじめでおとなしいというのはすでに定評があるところですが、卒業・修了生について会社などに問い合わせても「こつこつ良くやってくれています」などと評判は良いようです。ただ、リーダーシップという言葉は出てこないで、それはこれからの教育次第かと思います。私の場合は、一気にリーダーシップは無理と考え、その道で自信を持てるようなスペシャリストを育てることを心がけました。4回生の時から修士での学会発表をめざし、M1の間で4回、M2で4回、計8回の学会発表をめざして、「皆でその気になって頑張る」ようにしました。強制したことはありません。研究室全体がそんな雰囲気になって、研究し発表する楽しみを知ることが大切だと思います。おかげで研究は進んだのですが、筆の遅い私の論文書きが遅れ、退職後も3年くらいは論文を書くことになりました。そうでないと頑張ってくれた学生さんたちに申し訳が立ちません。

共同の研究機器が多く共同研究もやりやすい、これは本学の大きな長所であり、本学に来てよかったと思ったことの一つです。共同機器に関して丁寧に教示いただいた物質工学の先生方には厚く御礼申し上げます。先生方も事務方も大変丁寧に対応いただき非常に協力的にしていただけなのは、本学の大きな長所です。若干小ぶりな大学ですが、その分、協力して研究したり、うまくまとまって必要経費の申請・要求ができると思いますので、その特長を生かして発展していただきたいと思います。

退職にあたって



福田 民郎
(デザイン学部門)

松ヶ崎での生活、第2期目を卒業します。1期目は学生時代で60年代末から70年代にかけての6年間、そして今回は、1999年10月1日の赴任から10数年に及ぶ教員としての生活でした。民間からの転入で随分とカルチャーの違いに当初は戸惑ったものです。今ではそれらのひとつひとつが走馬灯のように、昨日のごとく思い出すことが出来ます。そしてとにかく早い年月の移り変わりでした。私自身としてはちょうど50代からは教育・研究生生活であり、40代の独立コンサルタント時代、20から30代の企業デザイナー時代と、振り返りますとこれまでは自分でも変化に富んだ人生であったと思います。自分の研究と若い学生達を相手にした職場としての松ヶ崎での生活は、産業界とは全く違った経験を与えてくれました。学生達の毎年の変化や成長、次々と卒業、そして新入生の入学、といったこのような様は、四季の変化と呼応してより時間の流れを加速したものです。

キャンパスの四季も往時と比較すると随分と変化しました。特に木々が大きく成長し、緑の量が圧倒的に豊富になったこと。春の桜や秋の紅葉も立派な姿をいまでは誇っています。またすぐ外側では、田畑がほとんどなくなったことなど、変化とともに懐かしさや寂しさ、そしてこのキャンパスで研究が出来たことといったある種の誇りなども入り混じった複雑な感情を松ヶ崎を去るに至って起こさせられます。

デザインを生業として今日まで無事生かされた感もありますが、デザインほど面白い分野は他にはないと思うほど強い思いを退職後も継続して保持したいと思っています。敬愛する司馬遼太郎は「人間にとって、その人生は作品である」との言葉を残しているが、私の退職後の残りの期間は、私にとっての人生が立派なデザイン作品となるように頑張りたいとも思っています。

漱石が松山を去る時の感情にも似た心は少ななきにしもあらずですが、最後に時代を共にした学生諸君に感謝と乾杯!!

退職挨拶



森田孝夫

(建築造形学部門)

ネットで論文検索ができる。例えば、鴨川河川敷・アベックと入れると、三条・四条間の鴨川河川敷に坐るアベックの間隔を調べた私の論文が見つかる。去年もネットでこの論文を調べたテレビ記者から「科学番組を企画していますが、なぜアベックの間隔が等間隔になるのですか」と核心をつく質問があった。私の研究の狙いはいつもとんちんかんで、等間隔の秘密が面白いことにやっと気づいた。

商店街の依頼で設計した三条大橋西詰の弥次喜多像が立つ小公園は、来訪者に喜ばれている。ベンチはセンターホール広場にある夏のひんやり感や耐久性のある石のベンチを引用し、弥次喜多像は私のスケッチを基に彫刻師に作ってもらった。うまくいったので恥ずかしい。

大阪大学のK先生から「お給料をもらって研究できるだけでも大変ありがたいと思って行きなさい」と励まされたが、私は惜しい事に膽力が欠けて居る。余りにも建築設計が出来過ぎる学生達ばかりで「一寸此問題を解釋しておくれんかな、もし」と言われたら、虚勢を張ってごまかす以外になかった。私には只一枚の舌をたたいて恐縮させる手際はない。漱石の「坊ちゃん」の小説にあるように、学生の前に行くことは、敵地へ乗り込む様な気がした。

白石博三先生は、一級建築士試験が卒業試験だと明言されるので恐縮したが、密かにH先生やM先生といっしょに一級建築士試験の合格を競った。科研の応募も、この筆記用具を使えば通るなどと、不思議なことを言って挑戦し合った。科研の審査員は年寄りだから、大きな字で書け、ミミズのはったような小さい字は読みもしない、と言う科研費常勝の先生もいた。今思い出せばおもしろいが、当時は深刻だった。

家族を養うお給料がもらえ、学生や同僚に恵まれて本当に楽しい37年間でした。熱く御礼を申し上げたいと思います。感謝感謝です。

寄稿

母校大学に寄贈二件

奥田進

(窯業科 昭和16年卒)

1 堀内正和作の彫刻 「すじかいまど」

2.5m×1.2m×0.75m 材質ステンレススチール

工芸学部創立80周年を記念して、京都工大会(工芸学部同窓会)から寄贈されました(1982年)。設置場所は美術工芸資料館の正面の反対側。堀内正和(1911-2001)

は日本の抽象彫刻を代表する作家の一人。東京高等工芸学校在学時に第16回二科展に最年少で入選。京都市立芸大教授。38年高村光太郎賞、44年現代国際彫刻展で大賞などを受賞されています。



2 石庭「炎」 六方石、ドラセナ、ツツジ、高麗芝を配した約30m² 40m²(約12坪)

窯業学科創立50周年を記念して、鴻窯会(同学科同窓会)から寄贈されました(1979年)。設置場所は12号館(元化学棟)北入り口前。やきもの、セラミックスが熱処理でつくられるので、「炎」と名づけられています。デザイン・施工は造園家岡本政一(1935-2008)、石碑〈炎〉は日展所属書家山本幽谷(1924-2011)の揮毫。鴻窯会は工芸学部初代学部長小島幸三郎(1892-1956)先生が名づけ親で、同会は年刊会誌を発行、創刊号(1979)

から昨年発行の34号(2012)まで、会員活動とともに継続されている。



KIT 同窓会 定期総会及び懇親会報告

KIT 同窓会前総務委員長 **森 本 一 成**
(電子工学科 昭和51年卒)

KIT 同窓会 定期総会

平成24年6月30日(土)16時から約1時間40分、新都ホテル BF「末広の間」において、本城博一会長以下75名の出席者の下で定期総会が開催されました。

議事に先立ち議長に本城博一会長が選出され、本城会長から、同窓会の沿革及び種々の協力依頼等の挨拶があり、引き続き、総務委員長から、平成23年11月20日及び平成24年6月2日に開催されたKIT 同窓会理事会の報告が行われ全会一致で了承されました。

以上の報告の後、以下の議題について審議を行いました。

1. 会則の一部改正(案)

設立趣旨の文言の整理、前納会費制の条文の削除、役員解任の条分挿入等の一部改正について、審議の結果、原案を一部修正のうえ全会一致で承認されました。

2. 支部に関する細則(案)

支部は都道府県単位又は地域単位と規定する内容の「支部に関する細則」の設置について、審議の結果、原案を一部修正のうえ全会一致で承認されました。



3. 役員を選出(案)

任期満了に伴う役員の改選が行われ、次の通り全会一致で承認されました。

会 長：三好 明 氏 新任
(繊維化学科 昭和31年卒業)

副会長：中村 淳 氏 再任
(建築工芸学科 昭和32年卒業)

副会長：伊藤一雄 氏 再任
(機械電気工学科 昭和36年卒業)

副会長：蔭山 薫 氏 新任
(養蚕学科 昭和39年卒業)

副会長：谷垣弘明 氏 再任
(製糸紡績学科 昭和43年卒業)

理 事：学内教職員理事21名を含む130名
(氏名等略)

監 事：西村太良 氏 再任
(製糸紡績学科 昭和41年卒業)

監 事：遠藤久満 氏 新任
(電気工学科 昭和44年卒業)

顧 問：古川敏一 氏 再任
(色染科 昭和14年卒業)

顧 問：松原藤好 氏 再任
(養蚕学科 昭和31年卒業)

顧 問：本城博一 氏 新任
(建築科 昭和23年卒業)

専務理事：志賀 均 氏 再任
(京都工芸繊維大学 Kit ビューロー)

4. 平成23年度事業報告について

審議の結果、原案どおり全会一致で承認されました。

5. 平成23年度決算報告について

議題6.の平成23年度会計監査報告と一括審議されました。

6. 平成23年度会計監査報告について

中森会計担当理事から、平成23年度収支決算

書(案)及び平成23年度貸借対照表(案)について資料に基づき説明があった後、西村監事から4月21日に福西監事と共に会計監査を行い、領収書、帳簿、預貯金通帳及び現金について、逐一照合し、精査した結果、異常は認められなかった旨の説明があり、審議の結果、原案どおり全会一致で承認されました。

7. 平成24年度事業計画(案)について

以下に掲げる事項について、審議の結果、原案どおり全会一致で承認されました。

- (1) 理事会開催
- (2) 定期総会及び懇親会開催
- (3) 会則の一部改正：文言の整理及び前納会費制の条文の削除等
- (4) 役員選出：任期満了に伴う会長以下の選出
- (5) 会誌第6号の発行(卒業生、在学生及び教職員に配布)
- (6) 会員名簿の維持管理：会員(約31,000名)データの有償管理
- (7) 同窓会ホームページの維持管理
- (8) 卒業記念品の贈呈：「学位記」証書ホルダー
- (9) 教育支援：「KIT 同窓会教育支援事業」
- (10) 学生行事の支援：松ヶ崎祭などの学生行事の支援
- (11) 支部活動の支援
- (12) その他

8. 平成24年度予算(案)について

審議の結果、原案どおり全会一致で承認されました。

9. その他

本城議長から、2か年間の会長職が無事に努められたことに対する会員各位へのご協力に感謝する旨の謝辞があり、続いて、松原顧問から議事進行の協力及び出席者に対する謝辞と、懇親会での親睦を願っている旨の挨拶がありました。



KIT 同窓会 懇親会

平成24年6月30日(土)18時から約2時間、新・都ホテル「陽明殿」において、74名の出席者の下、盛大にKIT 同窓会懇親会が開催されました。

KIT 同窓会本城博一会長から開会の挨拶があり、続いてご来賓の方々の紹介(京都工芸繊維大学長古山正雄様、元学長木村光佑様、前学長江島義道様、理事・副学長森迫清貴様、理事・副学長竹永睦生様、理事・副学長林 哲介様、理事・事務局長山下 馨様、大学院工芸科学研究科長松野謙一様(公務のため欠席)がありました。

京都工芸繊維大学長古山正雄様から来賓代表の祝辞の後、前学長江島義道様の挨拶に続き、元学長木村光佑様に乾杯のご発声をいただき、懇親会が始まりました。

会員各位の懐かしいお話を交え大変盛会の中で懇親会が進み、最後に、参加者全員で学歌斉唱を行い、三好明副会長(次期会長)の中締めのご挨拶で懇親会がお開きとなりました。



支部・部会の承認

平成24年9月15日に開催された理事会において、次の3支部及び5部会が承認されました。
会員各位におかれましては、支部・部会の活動に積極的な参加をお願いします。

支 部

名 称	責任者	連絡先	会員数	備 考
関東支部	市野 要助	03-5711-8154	75	1都6県、甲信越、福島県、静岡県の一部を包含
東海支部	野崎 駿吉	052-832-0554	300	東海地区
浜松支部(浜松工織会)	上野 宏史	0538-36-1034	56	大井川以西の静岡県

部 会

名 称	責任者	連絡先	会員数	備 考
衣笠同窓会	三好 明	075-724-7969	6,370	旧繊維学部同窓会
松ヶ崎デザイン会	吉羽 敏郎	072-834-0917	1,300	意匠系及びデザイン系の卒業生及び在学生
色染物質会	佐藤 忠孝	075-862-0616	173	色染(工芸学)科及び物質工学科卒業生
京工大機織会 (マコーン会)	黒田 清伸	078-783-1871	390	機織科、紡織科及び機織工芸学科卒業生
KIT ゴルフ会	坪井 弘光	090-5152-5824	100	年2回の定例コンペの開催

KIT 関東支部 facebook ページ

関東支部長 市 野 要 助

(機織工芸学科 昭和43年卒)

2013年1月10日、19:00から東京・霞が関ビル LB の Sign 霞が関で、KIT 同窓会関東支部の役員会を兼ねた新年会を開催しました。

参加者全員、和気藹々のうちに、旧交を温め、記念の色紙に決意を寄せ書きし、時間の許す限り歓談し、お年玉くじ引きして、来年の1月再会を約し、締めを2回して散会致しました。

今後は、facebook で KIT 関東支部のサイトをオープンにして、全国の KIT 同窓生に参加してもらおう形で会の運営・発展を進めていくことを採決しました。

facebook KIT 関東支部の事務局・管理は幹事の林佳輔氏がとりおこなう。関東支部長に市野要助、副支部長：水垣親房(S44電気卒)氏、監事：徳田莞爾(S44電気卒)氏と、福村直樹(S45繊維化学卒)氏、梅沢修(S46意匠卒)氏の各氏が役員になって支部の発展を図っていくことになりました。

KIT 関東支部 facebook のページは、林佳輔氏の facebook にぶら下がり掲載し、同窓生各位にオープンにして、同窓・OB の意見

交換の場として活用してまいります。OB 各位の参加を歓迎致します。

関東支部の活動域としては、関東1都6県、甲信越、福島、静岡東部と、かなり広域を予定しております。数年内に100人以上の規模を目指し、毎年1月に東京霞が関界隈で新年会・総会を行い、途中の6月頃に随時、新人歓迎会を兼ねた懇親会を開催して行きます。

これまで首都圏で活動してきた団体であるKIT 東京会(代表：市野要助)、及び、京都工芸繊維大学 OB の全国の知的財産権関係者の懇親会：叡翔会(会長：武石靖彦氏、副会長：市野要助、同：黒瀬雅志氏、同：神崎彰夫氏)とも緊密に協力して KIT 同窓会関東支部を大きく発展させていく予定です。

事務局アド：林佳輔；e-mail: hk@tylaw.jp
URL: <http://www.tylaw.jp/>
<https://www.facebook.com/home.php#!/kitdousoukaikantoushibu>

京工大機織会(マコーン会)について

マコーン会会長 黒田 清 伸

(機織工芸学科 昭和35年卒)

1. マコーン会の沿革

昭和35年10月大阪で95名が参加し「松ヶ崎工芸阪神機織会」の創立総会を開催。昭和40年頃、「マコーン会」(MAKOHN)が愛称となりました。昭和59年の総会で、関西地域に限定せず機織科、紡織科、機織工芸学科卒業生全員を対象に「京工大機織会」(略称：マコーン会)と改称。

「MAK・KOHN」はM(松ヶ崎)AK(オール機織)K(京都)O(大阪)H(兵庫)N(奈良)(世話役員の主たる関西府県名)。昭和46年の卒業生が機織工芸学科の最後となり、その後の当会への加入者はなく現在に至っています。

2. マコーン会の活動状況

現在、当会員は昭和10年代の機織科、紡織科卒業生から、昭和28年以降昭和46年までの機織工芸学科卒業生約390名です。運営は役員会を中心に、各学年2~3名のクラス幹事と多数の会員の支援を得て行っています。主な活動は毎年の定時総会・講演会・懇親会の開催と年2回の会報、マコーンニュースの発行です。これらを通して会員相互の親睦、交流を計ることを目的にしています。

毎年の総会には80名以上の会員が各地から出席。昨年5月の第52回定時総会・講演会・懇親会は母校で開催しました。山下馨大学理事・事務局長、森本一成教授、KIT 同窓会の本城博一会長、三好明副会長等のご来賓のお話を賜り一層盛大な会となりました。

マコーンニュースは、会員投稿、会員動向、文芸サロン、同好会便り等に加えて、近年クラス会便り、卒業50周年記念文等の報告が充実し、毎号36ページにも及ぶ多彩な記事が溢れています。国内外の会員を含め400部超の発送で、今年3月には第91号を発刊しました。

このように現在の活動状況は、創立以来半世紀以上にも及ぶ歴史を経て次第に充実発展し、大変良い絆の基に活性化しています。昨年は215名(会員の約55%)が年会費を納めて当会をサポートしています。偏に、歴代の会長、役員の方々の努力のもとに、全会員の協力によって築き上げられた賜物であります。

昨年、KIT 基金に総額30万円の寄付を達成しました。大学より記念盾が贈呈され、大学60周年記念館内に「京工大機織会」(マコーン会)と刻印したブロンズの銘板が設置されました。マコーン会の名を不滅のものとしたモニュメントは会員一同の喜びと誇りです。

3. 今後のマコーン会

会員数は、前述の経緯から高齢化と共に年々減少しています。この状況の中、当会の維持、継続をどのように計っていくのかは全員の直面している課題です。現在、全体として活性化しているものの参画意識に世代間のばらつきが見られます。今後の担い手である昭和40年代卒業生を喚起することが重要です。昨年2名の役員参加を計り、クラス幹事の皆さんの一層の努力をお願いしています。クラス会を総会と結びつけて開催する等PRして、当会の基盤であるクラス会が更に充実する事を期待しています。このようなポテンシャルを生かせば、今後尚10年、20年は活動を持続できるものと確信します。又、KIT 同窓会の1部会として大学全体の同窓の輪の中で、より一層の連携と交流が広がるように願っています。

最後に、「マコーン会は不滅」-「いざ集え昭和40年代」を合言葉の今年の創立53周年定時総会・懇親会をご紹介します。平成25年5月18日(土)にチサンホテル新大阪で開催し、古山正雄大学学長の基調講演を賜り、山下馨理事・事務局長、KIT 同窓会三好明会長等のご出席をお願いしています。



創立51周年定時総会 学歌斉唱

KIT 同窓会東海支部発足！

KIT 同窓会東海支部事務局 野崎 駿 吉

(窯業工芸学科 昭和44年卒)

2012年12月1日、京都工大会東海支部は名前を変え、KIT 同窓会東海支部に移行しました。本部のKIT 同窓会が出来てから5年目となります。今回の移行については、衣笠同窓会愛知県支部、岐阜県支部、三重県支部のご理解、ご了解を得て発足したものであり、大変意義深いものがあります。

同日、名古屋駅前の「ウインクあいち」会議室で、移行を前提とした平成24年度京都工大会東海支部総会が開かれました。

この席には、本部から蔭山薫副会長、衣笠同窓会岐阜県支部から支部長の畑和宏氏、永野稔昌氏の出席の下、磯田桂司副支部長の司会で議事の進行が行われました。KIT 同窓会東海支部発足の審議事項については、全会一致で承認され、福永昭三支部長(色染工芸・昭和40年卒)から発足を宣言しました。

総会のあと講演会に移り、本学工芸科学研究科／言語・文化部門の教授澤田美恵子氏から「京都の伝統工芸と大学教育」という演題での講演がありました。京都の伝統工芸技術を取り上げ、異なった観点から新しい商品として展開していく技法、大震災のあとの取り組み、海外での日本工芸の紹介、展開などの取り組みをお話いただき、出席者もいままでとは違った大学の状況を見聞きすることができました。

総会・講演会のあとは、会場を移し、北京料理店「百楽」で懇親会を催しました。ここでは、子供連れの参加者も加わり、予定時間をオーバーして、盛り上がりました。

ここで、京都工大会東海支部について少し述べさせていただきます

私の手元にあるのは平成7年6月の案内状です。東海支部長墨鉦平(色染・昭和18卒)、副支部長柴田金之助(窯業・昭和17)、瀬十記夫(図案・昭和17年卒・故人)、事務局長永井茂(化工・昭和20年卒)、常任委員藤野弘二(機織・昭和16年

卒)、日下部猛(精密・昭和17年卒・故人)、山脇昭二郎(電気・昭和26年)、監事小崎輝郎(色染・昭和16年卒)、宇都宮肇(精密・昭和17年・故人)、顧問水野茂樹(窯業・昭和7年卒・故人)の諸先輩方の名前が記されています。この年の東海支部の総会は7月29日に名古屋国際ホテルで開催されています。

この案内状には、「昭和35年に発足した当支部も35年を経る事になり、推進役であった水野利昌氏(色染・昭和11年卒・故人)から本会を解散したいという提案があり、云々……」という一文があります。

水野茂樹氏、水野利昌氏らの尽力により、続けられてきた同窓会において、解散の提案があったようです。幸い、この場で再編され現在に至っています。なお、発足当時、会場は今池にある中華料理店「東天紅」で開かれていたとの事です。

小生が、初めて総会に出席したのは、平成10年8月29日の総会(於：東山会館)からです。それ以降、毎年参加していますが、出席人数は、表からわかるように平成13年頃から50人を下回り、30人台まで減少しました。

平成21年、会場を名古屋駅の北にある産業技術記念館に移し、講演者にトヨタ自動車の松田喜彦氏(生産機械・昭和52年卒)と名古屋大学教授・大槻主税氏(無機材料・昭和63年卒)にお願



KIT 同窓会東海支部発足の挨拶をする福永支部長

いしました。この年より、出席者が増加し、現在は60人近い人数となりました。

東海地区には、窯業・無機材料工学科を中心とした鴻窯会東海支部、意匠・建築工芸学科を中心とした集まり等があります。また別途企業内での同窓会組織があり、これらの組織が縦糸と横糸の関係で参加者を募っています。トヨタ自動車の「松ヶ崎会」は、120名以上のOB、現役で構成されています。

今回、衣笠同窓会の三支部のご理解を得てKIT 同窓会東海支部が発足する事になったのは、組織の強化と連携を図る上でもまことに喜ばしいことと考えます。ただ、本会の目的は「会員相互の親睦をはかる」ことが主目的であります。いままで以上に活動を活発にし、会員の期待に応える同窓会に持っていきたいと考えています。

現在、工芸学部卒業者のうち、東海支部では約300名の名簿を把握しています。これに加えて衣笠同窓会の方が加わると、400名以上の大世帯となると思います。今後とも、KIT 同窓会東海支部への益々のご支援をよろしくお願い致します。



京都工大会東海支部行事の歴史(過去16年)

総会等開催年月日	開催場所	講演者	演 題	懇親会人数	支部長名
平成9年8月30日(1997年)	ロイヤルホテル弁天閣	加藤守光	東洋の陶磁器について	50	藤野弘二
平成10年8月29日(1998年)	東山会館	中川聖一	人とコンピュータとの対話	69	
平成11年8月28日(1999年)	ラフイネ東山	吉田徹彦	色彩を使った情報解析の世界	57	
平成12年8月27日(2000年)	ホテルプラセオ名古屋	岡田邦子	男は感謝されつつ…女は感謝しつつ…	53	
平成13年12月1日(2001年)	ホテルプラセオ名古屋		講演会は開催せず ^{(*)1}	50	瀬十記夫
平成14年11月16日(2002年)	アイリス愛知	鋤納忠治	インド紀行	47	
平成15年11月15日(2003年)	ノリタケの森[キルン]	中川 雅	ノリタケの森について	43	鋤納忠治
平成16年11月6日(2004年)	ノリタケの森[キルン]	岩月和人	ボケ防止と脳活性化ゲーム	45	
平成17年11月5日(2005年)	ノリタケの森[キルン]	岡田稔弘 山田毅典	トヨタのクルマ開発システム ― 初代ソアラ誕生の裏話	47	
平成18年10月28日(2006年)	ノリタケの森[キルン]	高澤史納	オンリーワンを目指して ― 繊維業界の一本杉：高澤織物	40	
平成19年11月17日(2007年)	セントレア	藤沢寿郎	最先端のエコ空港 ― セントレア	34	
平成20年11月15日(2008年)	産業技術記念館	寺嶋一彦	人と環境に優しいロボット：制御技術の研究	36	
平成21年11月21日(2009年)	産業技術記念館	松田喜彦 大槻主税	サスティナブル・モビリティに向けたトヨタの取り組み セラミックスの生体機能を利用する人工骨の開発	55	
平成22年11月6日(2010年)	ウイंकあいち (ローズガーデン)	瓦田伸幸 栗山幸子	学校のエコ改修について 最新のLED事情	55	
平成23年12月3日(2011年)	ウイंकあいち ^{(*)2} (ローズガーデン)	岡田稔弘 江島義道 森本一成	白洲次郎とソアラの開発 京都工芸繊維大学の教育研究の近況・将来像 総合プロセス(補綴)研究の動向について	55	
平成24年12月1日(2012年)	ウイंकあいち (百楽)	澤田美恵子	京都の伝統工芸と大学教育	58	

(*)1 懇親会の席で酒見定三氏より「大学改革について」の説明があった。

(*)2 教育研究東海地区交流会として開催

その他の行事

平成11年2月11日工場見学会：(株)INAX 参加人数47名

平成11年11月23日工場見学会：トヨタ会館・博物館 参加人数26名

平成13年3月20日工場見学会：(株)デンソー 参加人数58名

■ 平成24年度 KIT 同窓会 教育支援事業(1事業につき50,000円を支援)

学部

課程名	プログラム名	実施日
応用生物学	卒業研究発表のための支援プログラム	25. 2. 21
生体分子工学	4年次生の卒業研究履修のための理解促進	25. 1. 29
高分子機能工学	卒業研究のための研究室配属説明会	25. 1. 31
物質工学	課程教育の改善と効率化事業	25. 2. 18~ 25. 2. 28
情報工学	1回生を対象としたチュータ制度	24. 12. 1~ 25. 1. 31
電子システム工学	3回生のための研究室公開	25. 2. 15~ 25. 3. 1
デザイン経営工学	平成24年度卒業予定者の学生表彰	24. 4. 6~ 25. 3. 26
機械システム工学	教育改善プログラムの実施	24. 12. 1~ 25. 1. 31
造形工学	卒業制作展の開催	25. 2. 13~ 25. 2. 17

大学院

専攻名	プログラム名	実施日
応用生物学	修士論文審査会の開催	25. 2. 1~ 25. 2. 28
生体分子工学	プレゼンテーション能力向上を目指した修士論文審査会	25. 2. 18~ 25. 2. 19
高分子機能工学	修士論文研究発表会要旨集の作成	25. 2. 18~ 25. 2. 19
物質工学	1回生研究発表会	24. 12. 25
情報工学	中間発表会の支援	25. 1. 23
電子システム工学	ポスター発表による修士論文中間報告会	24. 12. 25
デザイン科学	デザイン科学専攻修士特別制作展	25. 2. 12~ 25. 2. 17
先端ファイブ科学	大学院教育プログラムの国際化の持続	24. 8. 22~ 24. 8. 25
バイオベースマテリアル学	京都国際シンポジウムにおける学生ポスター表彰の実施	24. 12. 10

造形工学課程 卒業制作展

造形工学課程長

鈴木 克彦

本年度も平成25年2月に13日から17日までの5日間、京都文化博物館本館5階ミュージアムギャラリーにおいて造形工学課程卒業制作展を開催いたしました。今年のテーマは「工織万博」。造形工学課程は意匠・建築・文化の各分野が混在した環境にあり、今回も工織ならではの分野を超えたバラエティ豊かな作品が集結しました。ゲスト審査員による公開審査会とゲストトークも行われ、会場は学内の講評会とは異なる熱気で溢れていました。ゲスト審査員は手塚貴晴氏(東京都市大学教授)、ムラタ・チアキ氏(株)ハーズ実験デザイン研究所代表取締役)、藤崎圭一郎氏(デザインジャーナリスト)の方々に、それぞれ建築設計、プロダクトデザイン、デザイン評論の各分野の第一線で活躍されており、学生による人気投票で選ばれた方々です。各々の専門の立場から学生作品を評価していただき、選抜された学生によるプレゼンテーションが行われました。その結果、それぞれのゲスト審査員から最優秀の作品が選ばれました。講評会の後はゲスト審査員を囲んでの懇親会。学生にとって大いに刺激となる充実した一日となりました。卒業制作展は4年間製図室で頑張り続けてき

た学生の集大成であり、制作展の企画、会場設営も学生自身の手によって実行されています。5日間をとおして約1,200名もの来場者があり、本学の造形教育に対して多くの関心を持たれていることが窺われます。

なお、ゲスト審査員による公開審査会で優秀賞として選定された3名の学生と学内審査で選ばれた優秀賞14名の学生には、KIT 同窓会教育支援事業の助成金により副賞を贈呈しました。また、(株)総合資格様からは本年も多大な協賛をいただきました。この場を借りて、心より感謝申し上げます。



洛西育ちの大阪人

森下 昭三
(紡織科 昭和24年卒)

大將軍で育ち、父は京友禅千總の凶案家でした。1949年旧制織維専門学校紡織科を卒業後即大日本紡績(株)へ入社、綿紡績の前紡主任から係長時代は合織紡に専念、1966年小寺(新)部長時代に国産合織第1号プラント輸出として、ビニロントウ紡績をフィリピン UMC 社で新工場を建設しました。1972年以後産業構造変化の影響が出始める中、台湾、中東、東欧に及ぶ海外事業に従事する傍ら、1976年に技術士資格を取得しました。社名が2度変わりニチボロ時代は貝塚で紡織の超近代路線を手掛け、日本のテキスタイル産業の進路を探索し続けてユニチカ(株)を定年退職。その後はサービス業界の社長経験を経て、北浦理事長体制の JTCC 入りしました。コンサルタント事業を根気よく続け、やる気のある中堅企業を支援し続けて84才の今日も、強気の経営者とドラッカー思想をベースに革新を語り、戦略計画の支援を実践しています。

趣味は、学生時代はバスケット漬け、中年以後ゴルフに転じ、ホームコースは枚方 CC。スポーツ観戦は野球とラグビーで阪神タイガースと早稲田の熱狂ファンです。カメラいじりが好きで36.3メガピクセルを駆って風景と祇園祭を撮りつづけています。

京～大阪の接点八幡市に住んで、双方の文化の心象を更に享受しようと齢を忘れて動き回っています。

KIT 同窓会の三好新体制に大いに期待をかけ応援しています、年配の OB 諸氏も支部及び部活動へ奮って御参加下さい。

衣笠禄栄会 平 清盛の京を歩く例会 福井 忠勝 (養蚕科 昭和26年卒)

24年度禄栄会は NHK 大河ドラマ平清盛が保元・平治の乱を終結させ、武士の王となって一門の繁栄を極めた頃の京都を訪ねることとした。午前10時半全国から12名の者が新幹線京都駅改札口に集合した後、市バスの岡崎法勝寺前で下車、目の前にある料亭「白河院」で昔を偲びながら昼食懇親の宴を催した。白河院は藤原一族の別荘地として創建されたが後に白河天皇に献上、現在は名庭のある私立学校振興共済事業団の宿泊所となっている。院内の庭園は平安神宮神苑・無鄰菴や円山公園などを手がけた庭師・小川治兵衛の作庭で小川流の山水・池泉回遊式の本格的な庭として名高い。当日は晩秋の好天に恵まれ最上席の部屋「平安の間」に陽光が降りそそぎガラス戸を開けさせる暖かさにビールの追加も加わって大いに会話がはずみ、お互い一年ぶりに元気な姿で再会できたことを喜び合った。2時間余りの宴会に別れを告げ平清盛の足跡をたずねるため全員貸切りバスの人となった。最初に向かった所は父・忠盛が自軍を駐留、拠点とした「六波羅蜜寺」へ詣でた。清盛・重盛当時には5,200もの一門の邸宅が建ち並んだが現在は清盛塚の供養塔と坐像(重文)が残るのみであった。次いで一行は清盛が後白河法皇の院御所として創建した蓮華王院(三十三間堂)を拝観した。堂内陣の柱間の数が33あることから俗に三十三間堂と呼ばれるようになったことを知った。京都では比類なき権力を手にした清盛もその栄華は長くは続かなかったが市内には新熊野神社・法住寺・正林寺・六道珍皇寺・蓮光寺など関係の旧跡も数多くあるが総べてを見て廻ることは出来ず、来年度の例会を大阪・神戸組にバトンタッチし午後4時京都駅で散会した。(平成24年11月7日記)



白河院庭先にて

卒業後の思い出、 新制大学第1回卒業生から

赤井 弘
(養蚕科 昭和28年卒)

昭和28年(1953)に京都工芸繊維大学繊維学部を卒業しました。農林省蚕糸試験場に就職し平成2年(1990)に退官し、同年から東京農業大学客員教授として現在に至っております。思い起こせば、衣笠のキャンパスで電子顕微鏡による研究を始めて以来、60年にわたって中断することなく研究を続けることができ、大変幸運であったと思っております。

心に残る思い出は数々ありますが、1966年にフルブライト留学により米国ウエスタンリザーブ大学に研究員として留学し、8カ月目に私の論文がサイエンスに掲載されたことです。当時は、アメリカではサイエンスへの掲載はかなり難しかったのですが、明解な電子顕微鏡写真による証明のおかげで即時採択され、アメリカの大学間では高く評価されました。

国内では、1968年から昆虫ホルモンによるカイコの発育および絹タンパク質生成の制御に成功し、1988年にはヤマユガ科の繭糸のみが多孔性繭糸であることを発見しました。

おかげで、日本農学賞やメンデル賞なども頂き、チェコのプラハやブルノも訪れました。

今も週1回は顕微鏡を覗くことが楽しみの一つで、後期高齢者にとって研究を楽しみながら続けることが最高の健康法であることを実感しております。



著編書の一部

私の作品^{イチノミヤ} 「ツインアーチ138」

鋤納 忠治
(建築工芸学科 昭和29年卒)

私は1954年、新制大学2期生として、工芸学部建築工芸学科を卒業し、日建設計に入社(当時は日建設計工務株式会社)、名古屋事務所にて13年間勤務し、旧東海銀行本店、岐阜県庁舎、名古屋商工会議所ビル等の設計に参画してきました。

1967年、(株)伊藤建築設計事務所の創設に参加することとなり、爾来今日迄45年間一貫して建築の設計・監理を専業とする道を歩んで参りました。その間、主として中部地方を中心として、後に東京事務所も開設をし、数多くの建築を世に送りだし、その中から多くの作品賞等を頂いて参りました。

その間、日本建築家協会での業績により2003年に名誉会員に推挙され、又、日本建築学会では2007年に終身正会員となりました。

ところで最近、私の設計した「ツインアーチ138(イチノミヤ)」というタワーの作品を、朝日新聞が大きく記事として掲載してくれましたので紹介したいと思います。

これは、愛知県一宮市の「木曾三川国立公園」の北部に位置する展望塔で、1995年に完成したものです。コンペで選ばれたもので、その当時からすると約20年も昔の思い出深い作品です。

JR 東海道線や名鉄名古屋線、或いは東海北陸自動車道から良く見えます。



「世界のサカタ」に贅辞を!?

川 端 一 彌

(窯業工芸学科 昭和29年卒)

1961年6月頃の去る土曜日、たまたま窯業教室の中澤研究室にて、植月監督(京工大名誉永久監督)の下、現役プレーヤーの大橋・浦野君と面談の機会に恵まれた。その日の午後、吉祥院ラグビー球技場では、毎年恒例の京都工大と洛北高校の練習試合が行われた。京都工大にとり、夏の合宿及び秋からの京都5大学リーグ戦に備えた前哨戦として、洛北高校は秋からのインターハイの京都地区予選に備えた前哨戦として、名門の高校生との腕?足?だめしとして定着していた。たまたま会社が171号線沿いの下久世にあり、大学の帰途にグラウンドに直行し、後輩の練習試合を観戦した。好天ながら観客の動員もなく、植月監督のジャッジで30分ハーフ、結果は15VS15の引き分けであった。新ルールの解説(変更点の説明)、試合前の準備体操等を実施し、内容のある極めて有意義な練習試合で、お互い秋の本格シーズンに向け十分な準備が完了できていた内容と記憶している。

2009年11月21日(出京都工大(KIT)同窓東京地区懇談会が、国立科学博物館で開催され、その後懇親会が、レストラン・レ・セオーンにて、学長主催で盛大に開催され、たまたまKIT同窓会の副会長職を拝命していた関係上日帰りで東京に出張していた。懇談会の会場で、昭和37年繊維学部繊維化学科出身のセカンドローの川端宗成君と名刺交換する機会に恵まれた。“お互い”「ムカシトツタキネズカ」でラグビー談義に花が咲き、川端君の吉祥院ラグビー球技場での洛北高校との練習試合の話題等実に愉快な一時であった。繊維学部出身のラグビー部のOB会も開催している由、今後の全体OB会の計画等連携しましょうとお互いの住所を確認し合えた。

話は、その当時の京都府立洛北高校(前身：京都府立京都第一中学校)の一年生部員で素晴らしいWTBの坂田君が在籍し、突破できても独走トライは難しい距離も簡単にダミーをから

ませ走破し、トライに直結、京都工大の駿足のCTBを見事な足うらタッチの巧妙なタックルで転倒させ、トライ防止をしでかしたり、凄く将来有望なキボウの星的存在であった。それがその当時の坂田君の印象である。試合後彼に、理系の大学志望なら京都工芸繊維大学も一つの選択肢として勧誘したものの、坂田君は「私は、将来NZカンターペリーでラグビーをやりたい。その為には、迷わず同志社大学に進学し、将来的にNZと極めて関係の深い近畿日本鉄道に行く」と将来設計も明確で素晴らしい好青年との印象をもち、彼の前途を見守る事とした。今後とも大学と高校の練習マッチの機会を設定して頂き、より発展を目指すべきとのコメントも大人の社会人の感覚の持ち主であること、彼のリーダーとしての豊かな人間性の一端をかいま見せて頂いた次第である。

浦野君が昨年鴻窯会の九州支部長に就任の由、役員会でラグビー部の後輩である事を知りました。彼の現役時代1961年当時の6月頃を回顧し、拙文を呈する事を許して頂きたいものである。

昨年の6月6日その京都一中の誇るべき後輩の坂田君が「パシフィック・ネーション・カップ」の日本VSフィジー戦のハーフタイムの時に、世界のラグビー殿堂入りの授与式が行われた由、誠におめでたい次第である。日本人の殿堂入りは勿論初めてであり、世界でも51人目の快挙で今後もでないだろう。現役時代Demi(デミ)の愛称で知られる同氏はNZ遠征で歴史的勝利を挙げ、世界のオールブラックスのジュニア戦で4トライを挙げ、NZラグビー年鑑によると「世界でも優れた5人の選手」にも選ばれている。縁は希なもの、高校時代の夢を完全に実現されたし、まさに実行の人坂田好弘氏の栄誉を当時を回顧しながら、当時の現役の大橋君・浦野君・川端君の反応が知りたいし、併せて坂田好弘氏の快挙の祝福をしたい。おめでとう、ジャパンラグビーに祝福あれ!!

私が絵描きになった切掛け!

石川 善一
(機械電気科 昭和32年卒)

元々絵を描くのが好きでした。幼児の頃字を習う前からよく絵を描いていました。これは誰しも同じだと思います。絵ではめしは食えんと言われていたので、電気を選び、松下電器産業へ就職し、社内で絵画部を結成、好きな者同士が時間外に描いていたものです。電気業界の全国絵画展があったので応募した所、全国一等賞に選ばれ喜んでいました。副社長に気に入られ、よく話をしていました。写生会にも来ていただき激励を受けていました。ある時、松下幸之助さんから注文が来ました。多分、副社長さんが話されたのだと思います。肖像画の注文でした。今まで肖像画は描いてもらわなかったのですかと聞いた所、小磯良平さんに描いてもらったが駄目だ。と言われたのでその絵を見せてもらいました。やはり気に入られるように描かなくてはならないと肝に命じ、気に入った写真を貸して欲しいと頼んで、数カ月後秘書から電話があって本社へ来て写真を見て欲しいとのこと。早速出向きまして勲章を沢山着けられた写真を多く見せられ、その中から数枚借用して描きました。完成した時、副社長に話した所やはり心配されて先に見せてくださいとのこと。これならば責任をもって紹介できると松下幸之助さんの事務所へ共に参りました。松下さんも気に入られ、直ぐ報道を呼ばれて記念写真を撮りました。この事実は時の総理大臣の耳に入り、私も描いてくれとのこと。その後、画商取引が始まり、プロの仲間入り。全国画家の団体に入会し、審査員になりました。誰でも一生懸命仕事に打ち込めば、良いものが出来ることを身をもって確認しました。オリンピックメダルや東京スカイツリー記念メダル等も採用されることになりました。人脈も増え、唯々感謝しています。

(作品写真はホームページを見てください。)

我が世話焼き人生

多賀谷 美伸
(生産機械工学科 昭和40年卒)

世話焼き人生の記録です!!

1. 学生時代

柔道部を創部、機織科2回生の先輩と立ち上げました。部員を集め、体育館に畳を敷いて稽古したのも懐かしい思い出です。近年部員不足で廃部とのこと残念です。

2. 会社員時代

日立造船(株)桜島工場技術部に勤務しました。作業標準化やIEが仕事で、兼任でしたが労組の役員を引受けました。福利厚生を担当時、食堂の御飯を各自がお櫃からお椀に盛る方式にかえたら、米の消費量が減ったのは想定外でした。勤続8年で転職。

3. 経営者時代

頼まれて社員50名弱の繊維工場の経営を任せられました。カーペットの芯地のメーカーで折りしも住宅建設ブームとなり、需要は多く、24時間連続操業しても供給できない時代でした。製法も進歩し、我社も様々な機能を附加した芯地を開発して業界に貢献しました。次第に生産は中国に移り、我社も40年の歴史を閉じました。中国への技術指導や移転の話は有りましたが、全て断ったのは良い判断だったと今も思っています。本業以外にも、同業種や異業種の勉強会や見学会を企画し、世話を焼きました。

4. オフビジネス

機械系工学科の卒業生が2000人を超した平成5年に、同窓会を同期の山口教授と立ち上げ、「松機会」と命名し、初代会長として10年間世話を焼きました。

地元和泉市で「和泉の国ジャズストリート」という音楽イベントの世話を焼いています。毎年9月末10数会場無料でライブを開催、約50名の学生や社会人ボランティアの協力を得て、約90バンド観客4000人が参加します。知力体力気力の続く限り、世話を焼きますよ!!

われら0170会(松機会)

八 田 誠 治

(機械工学科 昭和49年卒)

我々、昭和48年度卒業機械工学科同窓生は入学当時の学生番号「0170**」から0170会と称する同窓会を組織しており、不肖、私、八田誠治が幹事長を務めております。卒業後、5年ごとに一泊の同窓会を開催しており、バブル期には温泉地に出かけたこともありました。間もなく、卒業後40年を迎えようとしておりますが、毎回の参加者は約25名。住所の確認ができた同窓生は親の死目以外は、必ず参加するといった熱の入れようです。なぜ、これほどまでに結束が強かったのか？ 理由は、「よく遊び、よく飲み、とにかくよく遊んだ」ためと思っております。授業で習ったことは全く覚えておりません(真面目だった同窓生諸君！ゴメンネ)。カンニングに失敗して単位を落としたこと、カンペ(カンニングペーパー)が回ってこなかったのは誰々のせいだとかは、今でも酒の肴になっています。機械システム工学部門で毎年、卒業式に行われている「鏡割りパーティ」は、私たちの学年から始めた行事で40年近く続く、伝統行事(?)です。

でも、1つだけ学習したことがあります。25名の同窓生でエレベータの安全率実験の実証実験をしたことです。定員11名のエレベータに25名が1階から乗ると、5階に到着するかどうかの実験でした。(結果は、読者の方にお任せします。社会的な責任を取ることも併せて学んだ実験でした。)



8年前の35周年同窓会：約2名同期でない方が……

豊かな環境の次世代への 継承に向けて

清 水 伸一郎

(工業化学科 昭和56年卒)

私は、昭和56年3月に工芸学部工業化学科(環境化学講座)を卒業しました。小さい頃から環境問題に関心があったため、卒業研究は、川端成彬先生、今村成一郎先生、吉田潤一先生、兎谷和徳先生のご指導の下、高分子吸着剤による染色廃水の処理をテーマにさせていただき、卒業後も環境に関する仕事に就きたいと考えておりました。

昭和56年4月に兵庫県に採用され、最初の8年間は、主に水質関係の分析・研究を、その後、環境行政(ダイオキシン、アスベスト、地球温暖化、ヒートアイランド、環境影響評価、有害化学物質、環境保全協定、光化学スモッグ、環境情報など)、高圧ガス保安行政(一般高圧ガス、液化石油ガス、冷凍設備(フロン)など)を担当してきました。

平成24年4月からは、兵庫県丹波県民局(丹波市柏原町)で、環境行政全般を担当しています。丹波地域には、日本一低い分水嶺(標高約95m)があり、由良川(日本海側)や加古川(瀬戸内海側)の源流の里であることから、ホトケドジョウ(県レッドデータブック：Aランク)やバイカモ(同：Bランク)など貴重な動植物が多数生息しています。春には桜、初夏には蛍の乱舞、秋には曼珠沙華、紅葉、冬には雪景色など素晴らしい自然景観に恵まれた地であり、また、丹波竜の化石が発掘された地でもあります。こうした地域資源を活用して、関係機関、地域団体等と連携して環境学習の推進を図るとともに、自然環境を破壊する行為である廃棄物の不法投棄対策に取り組んでいるところです。

今後も、21世紀にふさわしい環境適合型社会を実現し、豊かな環境の次世代への継承に向けて、微力ではありますが、がんばっていきたいと思っています。

最後になりますが、同窓会員皆様のご健康とご活躍をお祈り申し上げますとともに、京都工芸繊維大学、同大学同窓会の今後益々のご発展を祈念申し上げます。

人間 本野精吾教授Ⅱ — 真美会でもデザイン力を発揮

石 沢 加津子 (意匠工芸学科 昭和51年卒)



寺社見学会での本野教授(前列中央)



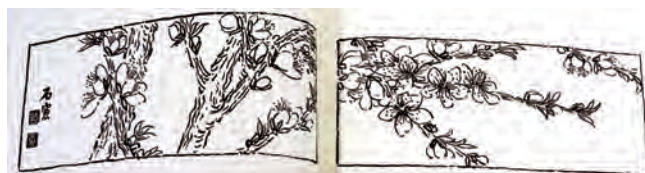
島津製作所(マネキン部・山ノ内工場)見学を引率する本野教授「標本部」が昭和12年に「マネキン部」と改称されて昭和18年まで存続。昭和7に河原町工場から(西大路)三条工場に、昭和9に山ノ内に移転。



上の写真は昭和13年卒業アルバム(福田卯之吉氏所有・福田清孝氏提供)より



2 刺繍 牡丹之額 (3尺×2尺)
京都高等工芸学校教授 本野精吾氏図案
箸尾清氏 刺繍
「真美の2」より
因みに、1は「工学博士 鶴巻鶴一氏作
蠟纈 双獅子襖絵(5.5尺×6.25尺)」



「真美 第十五巻」目次上カット(2頁に亘る)
本野精吾氏 (雅号「石憲」)



第40回夏の真美展作品
(真中の作品)「若竹」
本野先生指導作品

左頁：第41回秋の真美展作品
55(右上)向井先生指導作品「能趣味」
56(左下)本野先生指導作品「色鍋島」

本野精吾教授(1882-1944年)は、建築のみならず広くデザインの分野に才能を発揮されたことは有名だが、特に京都の伝統産業である染織界にも貢献されたことは見逃せない。

「大嘉(だいか)商店」(京都市五条通室町西入北側)は京呉服問屋の老舗で、当時の澤田孝三社長が「真美會」を創設。京都高等工芸学校の校長(鶴巻鶴一氏・村上宇一氏)や教授陣が長年に亘り協力した。

例えば、『第十巻真美第三号 昭和八年十月』には、冒頭に「帛紗 松竹梅 鶴巻博士作」(モノクロ写真)が掲載されている。

『真美第十五巻』には、第42回春・第43回夏・第44回秋の真美展作品がカラー写真で掲載され、本文には「真美精神」(向井寛三郎)や「江戸っ子」(霜鳥之彦)、目次カット(本野精吾)となっている。

また、卒業生の名前も見られ、「春の地色入選者氏名」には「A賞1点・C賞3点杉本忠三」とある。(杉本忠三氏については本誌No6の拙文をご参照願います)

「第42回春の真美展」は昭和13年2月6日に京都市公会堂において開催され「作品の主張、色彩計画の研究」がテーマになっている。

「第43回夏の真美展記録」では、研究会が昭和13年3月3日に矢尾政において開催され、「真美精神の高揚」と題して本野精吾・霜鳥之彦・向井寛三郎各教授が講演を行った。さらに上田健一氏が「最近欧米の染織」を講演している。

〈次ページ左下方に続く〉

拝啓、同窓会員様

八 田 正 隆
(蚕糸生物学科 昭和59年卒)

この度はこのような機会を与えて下さり大変有り難く存じます。私は昭和59年に本学繊維学部蚕糸生物学科を卒業させて頂きました。卒業後にご縁があって1年間の常勤講師経験を経て京都市教職員に採用されました。講師時も含めて今年で京都市立高等学校に勤めさせて頂いて29年目になります。

採用されて間もない頃は、生物の授業準備はともかくとして“人を教える事”には結構苦手意識があることに気づかされました。特に担任、部活等の指導については、戸惑いの連続で、自分には才能がないのではとたびたび自問する時期もありました。その時期に思い出したのは本学での恩師のお言葉でした。恩師は当時入学して間もない私達に「何でも好きなことを思い切ったらいいよ。君らがしたいことがあるなら何でも言って下さい。僕は君らのためやったら命をかけるからね。」とお声がけ下さいました。若者を仲間として迎え、その可能性を信じて尽力する。私はそのお言葉をそのように捉え、以来仕事に対する姿勢として参りました。

どの高校に異動しても敢えて担任を希望し続けました。この姿勢を盛り込んだ担任のカタチを見つけるために。部活動もあちこちの部の顧問を経験するよりも1つのカタチを身につけたく、大学以来始めたバドミントン部の顧問を希望し続けました。気がつけば29年間の教員生活の中でその約4分の3の21年間を担任としてクラスを持たせて頂き、3年生担任は今年で9回目となりました。またバドミントン部顧問も教員3年目から現在まで続けさせて頂き、最近では自校の顧問だけでなく、高体連の役員として微力ながら京都のバドミントンに貢献できる立場がまわってきています。

最後になりましたが現在の勤務校、京都市立塔南高等学校も含め職場でよく先輩方や後輩達とご一緒させて頂く事があります。その度に懐かしむと共に初心を思い出し、引き続き勉強しながらお仕事をさせて頂いております。

Enjoy!

辻 本 善 之
(応用生物学科 平成5年卒)

平成元年に入学以来、四半世紀となってしまった。本当に、「光陰矢の如し」である。制限もあるので、2004年4月から1年間、アリゾナ大学に客員研究員として留学した頃のことを主に書いてみたい。

工織大で修士号を取得後、京大院に編入学し、食糧科学研究所で、博士(農学)号を取得した。その後、1年間立命館大学でポスドク生活を送り、京府大の発酵生理学・応用微生物学研究室の助手として採用され、現在に至っている。当時の教授から海外留学を勧められ、恩師である角田先生のご紹介で、脂質輸送研究で世界的に有名な Michael A. Wells 先生の下へ留学することになった。アメリカでは、教授に対してもニックネームで呼ぶことが普通なのだが、「Mike」と呼ぶのに抵抗があったので、「Dr. Wells」と呼ぶことにした。先生からは、「Dr. Yoshi」と呼ばれていた。2週間に1回(1時間程度)のワンツーマンの研究進捗報告会が義務づけられた。その中で、結果報告以外にも細かい実験テクニックのご指導やプラベートな雑談などもあり、本当に有意義であった。そんなある日、それまで測定できなかった酵素活性を得ることが出来た。そのことを Dr. Wells に報告した翌日、Dr. Wells は朝8時ぐらいに、たくさんの Krispy Kreme Doughnuts を買って来て、「Dr. Yoshi が、酵素活性を測定することができた。みんなでお祝いしよう!」と言ってくれた。このときの Dr. Wells の笑顔は本当に素敵だった。実験の成功より、その笑顔の方が本当にうれしかった。しかし、その一方で、Dr. Wells には、研究センスがない学部生をクビにする厳しさもあった。

現在、京府大で微生物の研究をしているのだが、Dr. Wells のことを時々思い出す。笑顔で「Enjoy!」と言いながら、お菓子などをくれたり、少し疲れた顔をしていると、家で寝ることを強制されたりもした。研究や教育を「Enjoy」して、紳士的で厳しさもある Dr. Wells のような研究者・教育者に、一歩でも近づけるように頑張りたいと思う。

卒業後の動き

石原 定典

(機械システム工学科 平成19年卒)

私は平成20年度に機械システム工学専攻を修了しました。このたび、卒業後の動きを紹介することとなりました。まとまりの無い内容ではありますが、簡単に紹介いたします。

・学生時代

学部・大学院では、エネルギー変換輸送工学研究室(松野教授・山川准教授)に所属し、数値流体力学の研究を行っていました。

・現在の業務

修了後は機械メーカーに勤めており、業務では主に研究開発を行っています。機械メーカーということもあり、学生時代に学習した機械工学を業務で活用しています。特に、私の場合には、たまたま研究の内容と若干関係した業務を行っています。ただし、当然ながら、求められる技術程度の問題があるため、学生時代の不勉強および修練の必要性を日々痛感します。

また、学生時代には、資料を作成し、報告会で先生に研究の進捗を報告し、議論をする、という経験を積みました。この経験は、現在でも、業務の進捗を報告する際に大変役にたっています。ただし、やはり能力が不十分であることを感じております。

・休日の過ごし方

次に、休日の過ごし方を述べます。

学生時代から、読書が趣味であったため、休日には読書をしたり、書店に行ったりしています。比較的大きな書店が多く、様々な本が欲しくなる点がつらい所です。最近は電子書籍が目立っていますが、今のところ様子を見ています。絶版となった書籍が、電子書籍で刊行されることを期待します。

また、クラシック音楽の鑑賞も趣味です。このため、休日には音楽鑑賞をすることもあります。普段はCD、DVDでの鑑賞ですが、コンサートホールで行われる演奏会に行くこともあります。日程等の問題があるため、あまり頻繁には行けません。関東には楽団・コンサートホールが多いため、行われる演奏会は多くなっています。

以上、簡単ではありますが、卒業後の動きを述べました。

新しい分野との出会い そして今

岩元 美由紀

(先端科学技術課程 平成23年卒)

先端科学技術課程に所属していた私は4回生になる年の1月に研究室を自由に決めることができました。私は幾つかの研究室を考えていましたが、最終的には今現在所属している先端ファイブ科学専攻のメディア工学研究室への配属を希望しました。この研究室では工学的見地から高齢者・障がい者等の生活支援の研究を行っています。もともとこの分野は全くといっていいほど無縁な分野だったので、どの様なことをすればいいのかなど全く想像もつかなかったのですが、学部4回、修士1回、修士2回と進むにつれてなかなか奥深い面白い分野だなと思うようになり段々興味をもつようになりました。その中で、私の研究内容は高齢者のコミュニケーション支援の研究を行っております。今は施設等に協力をしてもらい実験を行いながら進めていっている研究ですが、今後は急激な高齢化社会に伴い独居・高齢者夫婦だけの家庭など他人とのコミュニケーションをとりにくい環境におかれた人たちにもコミュニケーションをとれるようなシステムを構築していきたいと考えております。難しいのは人相手の研究であるために、答えは1つではないことです。今まで一般的にはこうだと言われていたことですら、実験を行っていくうちに一般的なことは必ずしも全員にあてはまるわけではなく、あてはまらない人にとってはそれは苦痛にもなりうるということなど、そういう時はどうしたらいいのかなどいろいろ考えることもありますがそこがこの研究の面白いところです。また、世代を超えた多くの方々と知り合えるところもこの研究の魅力の一つだと考えております。もうすぐ修士を終えようとしていますが、この研究を続けていきたいと考えており修士修了後は博士に進みたいと思っております。急激に高齢化が進む中、少しでも役に立てるようなシステムを考えていけたらと思っております。

本学では、企業・産業のグローバル化が進行する現状にあって、異文化を理解しつつ専門分野について英語で議論のできる技術者・研究者の育成を目標とし、本学大学院生を企業体験、研究体験、教育体験のいずれかのインターンシップに派遣するプログラムを平成20年度から

実施してきました。5年間で98名の学生が本プログラムに参加し、13カ国、36機関でインターンシップに取組みました。

ここに、今年度参加した学生の短信をご紹介します。

イギリス留学で学んだこと

兼 田 諭

(先端ファイブ科学専攻 博士後期課程2回生)

イギリス・リーズ空港の税関で「空港には誰か迎えに来ますか？」と英語で尋ねられた際ほとんど英語を聞き取ることができずおそろとし冷や汗をかく、このような体験で留学の初日はスタートしました。迎えに来てもらった車の中でのこれからの1ヶ月間への不安な気持ちは今でも思い出します。

しかし、いざ生活が始まると、学生寮のルールやバスの乗り方といった一般英語から、文化財保存の技術や色彩デザインの意義などの学術英語まで、日常的に英語が飛び交う環境は私の聴く耳と、話す度胸を鍛えました。

イギリスで1ヶ月間過ごした日々は、私に多くの経験をさせてくれました。もちろん、ロンドンの大英博物館で見たロゼッタストーンや、ナショナルギャラリーで見た絵画の数々、電車から見たどこまでも広がる緑の牧草地は忘れられませんし、雨の中まったく来ないバスを待っていたのもいい思い出です。しかしこれら以上に、相手に自分の思いをうまく伝えられないもどかしさ、話される英語の一言一句を逃さぬようする緊張の連続、自分を知っている人が周りに一切いない心寂しさ、知らない土地で優しくしてもらったありがたさ、自分の気持ちが通じた喜びは胸に焼き付いています。この一月の経験は、再び海外に出るときの大きな自信になると思います。

最後になりましたが、このような貴重な体験をさせていただき本当にありがとうございました。



Vietnam internship

高 島 暁 子

(応用生物学専攻 博士前期課程1回生)

昨年の夏、英語での研究活動を通じてグローバルな視点を養うことを目的とする海外インターンシッププログラムで、本学学生7名とともにベトナムに約2週間滞在しました。ベトナム最大の都市であるホーチミンとメコン・デルタ最大の都市であるカントーでは、ホーチミン市自然科学大学とカントー大学を訪れ、ベトナム人学生とともに学生実験をおこないました。英語で話し合いながら研究計画を立てて実験作業をおこなうことは初めての経験で、当初はお互いの言うことを理解するのに大変苦労しました。しかし、筆談やイラストを使い、何度も聞き返しながらコミュニケーションを深め、最後の報告会まで無事にやり遂げることができました。また、日本での研究内容に関する英語でのプレゼンテーションもたいへん有意義な経験でした。滞在中は、日越ジョイントセミナーへの参加やベトナムに拠点をおく日系企業の工場見学もおこないました。海外で働くことに対しては敷居が高いイメージを持っていましたが、より良いものをつくろうとするものづくりの姿勢は海外でも同じであるというお話を伺い、選択肢の一つとして積極的に考えてみたいと思うようになりました。今回の滞在を通じて、文化や言語の違いを超えて、一生懸命論理的に伝えることの重要性を体感することができました。このような貴重な体験をする機会を与えていただいた本学及びベトナムの関係者の方々に厚く御礼申し上げます。



ベトナムでのインターンシップ

小林 ふもと

(情報工学専攻 博士前期課程1回生)

私は本学の海外インターンシッププログラムに参加し、1ヶ月半の間、ベトナムの首都ハノイ市に滞在しました。海外渡航はこれが初めてのうえ、ベトナムについては戦争映画で見たことがある程度でした。実際に滞在してみると、高層ビルが次々と建設されており、今まさに勢いのある国という印象を受けました。

お世話になったのは、パナソニック R&D センターベトナムという、家電製品向けソフトウェアの研究開発拠点で、社内の公用語は英語でした。私はそこで、ベトナム人のプロジェクトリーダーの方のもと、製品開発に参加しました。開発を円滑に進めるためには、不明点があればすぐに相談し、解消しておく必要があります。そのため、相手の言うことを理解するだけでなく、自発的にコミュニケーションをとることが求められました。また、プレゼンをする機会も複数あり、自分の意見を英語で伝える能力が鍛えられました。

昼休みには、社員の方と互いの国の文化等についてよく雑談しました。お互い第二言語での会話になるので、上手下手はあまり気にせず楽しめました。また休日はハノイ付近の観光に費やしました。他にも、社員の方の実家に招かれるなど、異なる文化に触れる機会が多くあり、日本に籠っていた私にとって良い刺激となりました。

ここで挙げた以外にも、多くの貴重な経験ができ、本プログラムには大変満足しています。海外での仕事に興味のある方は、是非参加するべきかと思います。



海外インターンシップ体験記

山本 祐也

(物質工学専攻 博士前期課程1回生)

私は外国人と日本人が50:50という国際性豊かな研究室に所属している事もあり、海外に行く事に非常に興味を持っていた。修士一回生の夏に「海外インターンシップ」制度の存在を知り、自分の英語は海外でどのくらい通用するのか、また京都工芸繊維大学には無い分析機器を扱ってみたい、そんな思いから今回海外インターンシップの申し込みを決意した。留学先はイタリアのトリエステ大学で、現地に着いて教授と今後の研究に関するお話をさせていただいた。トリエステ大学の学生は毎朝8時30分には学校に登校し、夕方の5、6時くらいに帰宅するという規則正しい生活を送っており、研究に取り組む姿勢に感心させられっぱなしだった。また留学で訪れてきた私に積極的にしゃべりかけてくれ、分析機器の扱いや解析方法を丁寧に教えてくれたりし、非常に嬉しかった。また研究以外においても一ヶ月もの間、イタリアで生活し、その文化に触れる事で今まで日本でしか生活した事のない私にとって今までの常識を覆すような非常に貴重な体験をさせていただいた。休日には電車を利用して他の都市に赴き、日本とは違った文化に触れるとともに流通システムの違い、土地利用の違い、また物の考え方の違い等を学んだ。海外インターンシップ制度を通して、これらの日本と海外との違いを経験できた事は今後私が社会に出て活動していく中で大きな強みになると思う。



先端ファイブ科学部門 森本 一成
(電子工学科 昭和51年卒)

平成25年3月4日、60周年記念館記念ホールにおいて開催された標記の報告会について紹介します。はじめに古山学長の挨拶がありました。本学では震災復興支援室を立ち上げて活動の支援をしているが、学生と教員が一緒になって復興支援にあたるということと、各研究室の専門領域を通じての活動を継続的に行うことに特徴があるとの説明がありました。その後、今年度採択された以下の5件のプロジェクトの成果報告がありました。(報告順)

- 久保雅義(デザイン経営工学部門教授)被災地ちぎり絵ワークショップを通じた仮設住民のQOL調査と阪神淡路大震災VS東日本大震災に見る非常持ち出し品への意識と実態について：デザイン経営工学の益田くんが発表。2011年から行っている避難所の復興支援(石巻、女川、陸前高田市、大船渡など)の紹介、ちぎり絵ワークショップによるコミュニティ形成、非常時のための備えなどについての活動報告がありました。
- 澤田美恵子(言語・文化部門教授)ECO Shirts Movement 草木染めワークショップ 京都～直島：オーガニックコットンで作ったTシャツを京都、直島、上海、パリ、ミラノなどで展示して集めた募金を、あしなが育英会に寄付している活動などの紹介がありました。特徴は、10数カ国の留学生と日本人学生が一緒になって活動していることです。
- 阪田弘一(建築造形学部門准教授)宮城県気仙沼市における仮設住宅団地を中心とした住環境改善支援プロジェクト：建築造形学の上野くんと井上くんが発表。仮設住宅の冬場の結露対策、断熱テープによる保温対策、屋根断熱性能の改善、コミュニティ構築復興支援(あかりカフェ設営、野外映画祭の企画、移動式石釜の制作)、製材所再生などの活動の紹介がありました。
- 仲 隆介(デザイン経営工学部門教授)牡鹿半島復興支援活動の継続および被災地における住民意向調査：Arch+Aidの活動といっしょに行っている十八成(くぐなり)浜の高台移転などに関する活動の紹介がありました。学生の考えたデザインを仮設住宅の住民に提案して、話し合いを重ねて活動していることが示されました。
- 森本一成(先端ファイブ科学部門教授)福島県南相馬市といわき市における障害者作業所の復興支援について—人間工学の視点から取組む作業者の労働衛生に関する実践的活動—：原発事故が障害者の生活へ与えた影響調査と障害者作業所の労働衛生に関する問題解決などを通じた復興支援についての活動報告がありました。

(KIT-京都試作ネット連携交流会)報告

平成25年3月7日、京都工芸繊維大学60周年記念館において、標記の報告会が開催されました。130人を超える参加者があり活発な意見交換が行われました。最初に、古山正雄学長は、ポストクとベンチャー起業についてはこれからどうするかが問題であることや、学生諸君には2人の講師のお話を単なる知識としてではなくリアリティを持って聞いてほしいことなどを強調されました。

曾根洋一氏(日刊工業新聞取締役大阪支社長)は「日本のものづくり — 新たな成長を目指して —」と題して、技術で勝って事業で負ける日本の実態について様々な具体例を挙げてわかりやすく説明されました。また、今も企業は研究を日本の大学にではなく海外に出すという実態があることや、モノ作りの人が尊敬されていないことをなどが問題だと指摘されました。今後は「何かについてはすべてを知っている」ではなく「すべてについては何かを知っている」といった人材(ポリネータ)が必要などの新たな成長のためのキーを指摘されました。

橋本忠朗氏(SixPoint Materials, Inc. CEO/CTO)は「アメリカでの起業事例 — SixPoint Materials, Inc. での経験から学ぶベンチャー企業を取り巻く環境の日米比較 —」と題して、自らが会社を辞めて起業するまでの経緯と起業してから現状までについて適宜ポイントを押さえて説明されました。インパクトのある切れのいいプレゼンテーションでした。特許など技術的な優位性が必要なことは無論、起業には人を引きつける魅力が必要なことを指摘されました。これは人間関係力の大切さを再認識する上で学生達にはいい刺激になったようです。最後に、ベンチャーの起業には目標に向かって情熱を持ち続けることが大事であることを強調されました。

続いて、今年度ベンチャーラボラトリーが新たに企画した、学生グループを対象とした研究プロジェクトの成果発表(以下3件)が学生代表よりありました。

岡田俊明(応用生物学専攻)、小山田拓司(デザイン科学専攻)「食の機能性を評価し、伝える研究プロジェクト — メタボリックシンドロームの改善・予防を目指して —」

池田一希(機械システム工学課程)、本郷陽平(デザイン科学専攻)「歩行困難者にやさしい小型パーソナルビークルの開発」

松山洋平(生命物質科学専攻)「microRNAを標的としたTriple Negative breast cancer 治療法の開発」

学生の発表に対する企業の方達からの質問や指摘はプロジェクトを推進する学生達の励みになり、非常に充実した成果報告会でした。

■ 衣笠同窓会 講演会開催報告

講演会 企画実行委員長 **北 丸 豊**
(養蚕学科 昭和52年卒)

平成24年12月15日(土)に京都府、京都市の後援のもとで京都工芸繊維大学と、京都原糸商協同組合との共催で

京糸教室
次世代型繊維への挑戦
— ナノファイバーとニューシルクロード —

と題して東京工業大学名誉教授谷岡明彦先生に「繊維産業は再び発展する」「ナノファイバー・ネットサンス」、東京農業大学長島孝行先生に「千年持続社会と第二次養蚕業時代」「NEW SILK ROAD」の講演をお願いしました。

講演会を午後1時から4時間「大学センターホール」で、名刺交換会を立食パーティ形式で午後5時から約2時間「KIT HAUSE(大学生協)」で開催いたしました。

日本の繊維産業の衰退、繊維への無関心化に対しての不安を感じての繊維学部同窓生の熱意で実現した講演会であります。

大学単独ではなく、業界との共同事業であり、京都の基幹産業である繊維産業への問題意識を共感してくれていた行政の後援も得て、同窓会として初めて企画した講演会であります。

参加者からは繊維産業の将来の可能性、必要性を改めて実感した、繊維産業は日本にとって必要不可欠なもので、本学ももっと積極的に世界に冠たる京都工芸繊維大学の繊維研究を進め、世界を積極的にリードし、学生を教育し、またそのことを対外的にも宣伝してほしいとの声を聴きました。

講演会に260名、パーティには160名の参加をしていただくことができました。

参加者の割合は業界の方40%卒業生の方30%学会関係20%その他学内の先生方、関係官庁の方たち10%程度の内訳でありました。

京都工芸繊維大学の学生、先生の参加が少なかったことが残念でありました。

次回からは京都商工会議所、大日本蚕糸会をはじめとした他の団体からの後援も約束していただいております、これからこの講演会をさらに発展させて、われわれが培ってきた繊維産業のさらなる発展と、繊維教育、研究をさらに今まで以上に推し進められるよう大学に対して同窓会としても全面的に協力していく所存です。

今後とも同窓会各位にはご協力をお願いいたします。また、今回ご参加いただけなかった方々には是非次回からご参加していただきますようお願いいたします。

この講演会の内容をダイジェストはサイトで、全編はDVDでご覧いただけるようにします。

DVDご希望の方はKITパビリオン(FAX075-724-7969)までご注文ください。

■ 衣笠同窓会だより

平成25年度理事会・総会のご案内

衣笠同窓会
会長 **三 好 明**

平成25年度衣笠同窓会理事会・総会を下記の通り開催いたします。皆様におかれましてはご多忙かと存じますが、ご出席下さいますようお願い申し上げます。

日 時 平成25年 6月29日(土) 午後2時から

場 所 ウェスティン都ホテル京都

- 議 題**
1. 平成24年度事業報告及び決算報告
 2. 平成24年度会計監査報告
 3. 平成25年度事業計画及び予算案
 4. その他

衣笠同窓会の理事会・総会のみにご出席される方は、大変お手数ですが、次の所までご連絡くださいませ。電話・FAX 075-724-7969

なお、当日は同ホテルにて京都工芸繊維大学同窓会(KIT 同窓会)の総会と懇親会が開催されます(総会は午後4時から、懇親会は午後6時からの予定)。

KIT 同窓会の総会・懇親会にご出席される方は必ず同封の葉書にてご連絡下さい。

衣笠同窓会の各都道府県支部の皆様へ

衣笠同窓会
会長 三好 明

現在、本同窓会は会誌(衣笠同窓会誌)の発刊を休止しております。そのために会員の皆様からのお便りは、このKIT会誌に掲載しております。

しかし、今後も衣笠同窓会員の皆様の親睦をはかるためには、本会及び会員相互の連絡が大変重要です。会員の皆様の動向を把握しておく上で重要となりますのは各都道府県単位の支部活動です。そこで、本会としましては今一度各都道府県支部の現状(支部の代表者様や連絡先)を把握しておく必要があります。

まだご連絡いただけていない場合は、以下の所へ都道府県支部の代表者様や連絡先を郵便、電子メール等でお知らせ頂けると大変ありがたいです。ご協力をお願いいたします。

連絡先：衣笠同窓会事務担当 澤野井裕文

E-mail: hsawanoi@woody.ocn.ne.jp

住 所：〒603-8104

京都市北区小山東玄以町21番地

美術工芸資料館の活動

並木 誠士

(美術工芸資料館長)

2012年度の美術工芸資料館の活動をご報告いたします。

2012年度は、「開館30周年記念展3 第11回村野藤吾建築設計図展「新出資料に見る村野藤吾の世界」」で幕を開けました。新たに発見された図面資料群のなかから、際立った特徴を持つ作品に焦点を当てたこの展覧会は、大変多くの方にご来場いただき3回にわたる開館30周年記念展の最後を飾るにふさわしい展覧会となりました。

5月からは、「コレクションで辿る20世紀日本の絵画」展を開催しました。ポスターや建築図面で語られることの多い美術工芸資料館ですが、近代美術を彩る絵画作品も700点近く所蔵しています。今回は、京都高等工芸学校の教員が残した20世紀初頭の洋画と同校色染科の卒業生で、大橋化学工業株式会社社長であった故大橋嘉一氏が収集された現代美術コレクションのなかから、1950~60年代の日本の前衛美術作品を選び、すぐり、「洋画」が「現代絵画」になるまでの20世紀日本の絵画を辿りました。

7月からは、2階で、2009年に開催して大変好評を得た、学内教員作品による展覧会「創造のプロセス 想像力のありか — 京都工芸繊維大学教員作品展 —」を開催しました。大学は、教育・研究の場であると同時に、すぐれた創造の場でもあるべきであるという信念のもと、本学の教員が、第一線で活躍する研究者であると



教員展

同時に、ものづくりの最先端でも積極的に発信を続けていることを大学内外に示す機会となりました。

また1階では、毎年恒例の博物館実習の受講生による企画展として「アール・ヌーヴォー 自然へ回帰する女性 Ladies and Nature」と「亀倉雄策の表現した日本 Japan is here」を開催しました。作品選びからディスプレイまで学生たちが夜遅くまで残って準備をおこない、工夫を凝らした展示に仕上げました。日常の収蔵品管理業務の学習に加え、こうした実践的な取り組みも博物館実習の重要な柱のひとつとなっています。

また、9月には、「SD レビュー2012 第31回 建築・環境・インテリアのドローイングと模型の入選展」と「京都工芸繊維大学中野デザイン研究室伝統工芸プロジェクト 伝統の虫 vol.5 swich 伝統の見方を、スイッチする。」展を開催しました。現在活躍中の若手作家の取り組みや、同級生たちによる、学生ならではの発想と実験的なアプローチを試みたフレッシュな作品は、他の学生たちの創作意欲をおおいに刺激したことと思います。

10月には、美術工芸資料館が毎年続けている収蔵ポスターの展示として「そうだ、旅に出よう — 旅情を誘うデザイン —」展を開催し、旅にまつわるポスターを中心に、旅行用グッズから旅先で出会うデザイン、空想旅行を描いた玩具まで、私たちの旅情を誘うデザインの数々



タイプライター展

を紹介しました。そして、この展覧会を題材に、今年度も松ヶ崎小学校の美術教室をおこない、小学生たちが実習生と一緒にクイズをときながら、大きなパズルを完成させました。完成したパズルは、作業風景とともに1階ホールに展示し、その成果を多くの親御さんに見ていただくことができました。

同時期に、京都大学総合博物館でおこなった京都・大学ミュージアム連携企画の展覧会「大学は宝箱！ — 京の大学ミュージアム収蔵品展 —」も忘れてはなりません。この展覧会は、2011年度より本学が中心となって活動を続けている京都市内14大学15ミュージアムが参加する「京都・大学ミュージアム連携」が合同で企画したもので、国宝や重要文化財を含む、これまであまり一般に知られてこなかった大学ミュージアムの美術工芸資料を一同に展示し、多くの人びとの目を驚かせました。美術工芸資料館からもロートレックのポスターや浅井忠図案の工芸品、白髪一雄の絵画、建築図面など、本学の特徴を示す多くの作品を出品しました。こうした取り組みは、京都ではじめての試みであるだけでなく、全国的にも珍しく、いくつかの企業には協賛をいただいたほか、新聞・テレビ・ラジオなど多くのマスコミで紹介され、京都内外から9000人をこえる人びとにご来場いただきました。他府県の大学の関係者からの反響も大きく、今後の展開に注目が集まっています。また、4月からおこなってきた連携ミュージアム15館を巡るスタンプラリーも好評で、継続が望まれています。

また、昨年に引き続き、文化遺産教育研究センター企画の展覧会も3本おこないました。11月からは、「1900年前後の幻燈画 — 美術工芸



大学は宝箱

資料館所蔵写真乾板展」を、今年1月からは、「大原女 — 柴売りから観光資源へ —」展を、また3月には、建築系の展覧会として、「タイの水辺集落」展を開催しました。「1900年前後の幻燈画」展は、京都高等工芸学校設立当時に講義で使われていた写真教材を展示するなど、当時の教育内容をかいまみることのできる興味深い展覧会となりました。また「大原女」展では、京都イメージとして知名度はあるもののその詳細については忘れ去られつつある「大原女」の文化を、「タイの水辺集落」展では、現地調査にもとづいた研究成果を、写真パネルを中心に、ひろく一般に紹介します。

2月からは、第12回村野藤吾建築設計図展「都市を形づくる村野藤吾のファサードデザイン」が始まっています。村野藤吾が都市のなかで試みた大小21件の建築作品を取り上げて、端正で格調の高いデザインに込められた建築思想の在りかを確認めようとする展覧会です。ぜひ、会場へ足をお運び下さい。



写真展



美術教室

第10回全日本学生フォーミュラ大会優勝報告

射場大輔
(機械システム工学部門)

平成24年9月3日からの5日間、静岡県小笠山総合運動公園(エコパ)にて開催された第10回全日本学生フォーミュラ大会(主催：公益社団法人自動車技術会)において、本学の学生フォーミュラチーム“Grandelfino”が総合優勝を果たすという快挙を成し遂げました。FA(Faculty Adviser)として大会に参加し、学生達と一緒に味わった感動を、本紙面をお借りして簡単に報告いたします。

学生フォーミュラ大会とは、学生が自ら車両を構想・設計・製作するばかりでなく、チームの運営も行い、年に一度開かれる大会でものづくりの総合力を競い合う場です。単に速い車両を開発するだけでなく、その設計概念やコストなど多様な評価指標により総合成績が決まる競技となっています。

本学の学生チームは第5回大会より参戦し、初代のマシン GDF-01から同じコンセプト(小型で軽量の車両でテクニカル区間最速を目指す)でマシンの開発を行い、6回目の出場となっ



走行前の最終確認



大会閉会式にて(中央が本学のマシン)

た2012年、初の総合優勝を果たしました。耐久走行競技と燃費の両部門で1位を獲得するなど、速さと経済性を両立させた車両による優勝でした。

大会の規則ではエンジン排気量が610cc以下とされていますが、本学チームのエンジンは450ccであり、他校と比較しパワーは劣りません。ただし、単気筒(3気筒が主流)であるため小さくて軽く、車両を小型化、軽量化できることが優位点です。参戦初年度は52位でしたが、その後、34位、13位、30位(耐久走行リタイヤ)、そして2011年度は総合12位と着実にその順位を上げてきました。こうした確実な結果を残せたことから車両の設計コンセプトの正しさを実感しつつ、チーム運営における適切なマネジメント、車両の製作精度や車両のセッティング技術の向上、さらにドライバーの運転技術の向上など、上位に食い込める実力がついてきたと感じておりました。



大会コースを疾走する本学のマシン



大学の宣伝をかねた大会用ポロシャツを着て会場を歩く学生

前大会が終了した直後に新チーム体制を整え、6位入賞を目標に車両の開発を始めました。学生が運営しているとは思えない程厳格なスケジュール管理の下、予定より二日早く3月30日に新型車両 GDF-07の試走を行うことができました。その後も試走を重ねて300km以上の走行をこなし、着々と本大会に向けて準備を進めてきました。

残暑厳しい9月の初旬に開催される大会では参加する学生やマシンにとって非常に過酷な環境となります。開催初日から二日目に行われる参戦車両の車検や静的審査(コスト、デザイン、プレゼンテーション)を難なくこなし、2006年に初めて参加した当時のチームと比較して格段に総合的な実力が向上したことを実感しました。その後、動的審査に移り、アクセラレーション



大会閉会式の一コマ



閉会式終了後の撮影会

(0-75m 加速性能を競う)で16位、スキッドパッド(8の字コースを周回し、旋回性能を競う)で2位、オートクロス(直線やスラローム、シケインからなる約800mの周回コースでタイムを競う)で1位、そして大会のメインイベントであるエンデュランス(周回コースを約20km 走行し、走行性能や耐久性を競う)で1位、さらに燃費(エンデュランス時の燃料消費量を評価)においても1位を獲得し、動的種目の総得点で大会史上最高スコアを記録して優勝しました。(詳細は <http://www.jsae.or.jp/formula/jp/10th/review.html>)

チーム結成時は2名だったメンバーもいまでは40人を超え、大会に参戦するチームの中でも大所帯となっており、今後ますます本学チームの活躍が期待できます。フォーミュラ大会に参戦することで学生がものづくりに携わることは将来の糧となると考えているため、今後も微力ながら彼らの活動をサポートしていきたいと思えます。

最後になりますが、この活動を支えていただいております本学の教職員の皆様、また車両製作に多大な貢献をさせていただいておりますものづくり教育支援センターの技術職員の皆様、様々な形でご支援いただいておりますスポンサーの皆様に感謝の意を表します。

課外活動

ギター部

部長 中ノ坊 俊
(電子システム工学課程 2回生)

私達ギター部は、現在、現役生9名で活動しており、主にクラシックギターを弾いています。人数は少ないですが、演奏会の毎にOB・OGの方々が参加されるので、演奏会は新入生から院生までの幅広い年代が集まります。

部員の嗜好も様々で、ソロに熱意を注ぐ者やデュオや重奏を積極的に呼びかける者など様々です。そういった嗜好の違う部員が冬の定期演奏会は一同で大合奏をします。ここではソロや重奏では味わうことの出来ない一体感を感じられ、また演奏に迫力もあります。夏場からこの合奏に全力を注いで練習することもあり、大合奏は私達ギター部の一年間の集大成と言うことが出来ると思います。

普段は金曜日に練習していますが、部室には授業の合間などに部員がよく自主練習に来ており、個人練習から合奏のパート練習など練習日以外にも皆熱心に練習に励んでいます。

他にも6月に開催される独重奏会や他大学との合同演奏会も行なっております。ぜひご来場下さい。



交響楽団

部長 濱田 大貴
(応用生物学課程 2回生)

私たち京都三大学合同交響楽団は、その名が示すように京都府立医科大学、府立大学そして工織の三大学が中心となり結成される交響楽団です。実際は京都内外の多くの大学の学生が集まる、全国でも珍しい体系のサークルとなっております。主な活動としては、年二回の定期演奏会を主軸に、三大学での式典演奏、その他依頼演奏なども行っております。様々な大学の学生が入り交じりながらも、音楽という大きな目的に向かって不思議とひとつになっていく。もともと、音楽とは多くの場合一人では成立せず、価値観の違う人々が集まって作っていくものです。規模が大きくなればなるほどその難易度も自然と上がっていきます。複数の大学の学生により成り立つこともあり、当団体は様々な形でその影響を強く受けます。ですがそういった「壁」を乗り越え得られるものは何物にも代え難いものです。機会があればそんな私たちの作る音楽を聴いていただきたいと思います。



漫画研究会

部長 山鹿 啓吾
(物質工学課程 2回生)

各々が独自の世界観を生み出して、それを漫画にしています。描く漫画の発想の仕方はそれぞれ自由です。そのために旅に出かけるのも自由です。漫画は夏と春の長期休暇を利用して描いています。なので、この長期休暇を部員は有意義に原稿に打ち込むことができます。できた漫画は集めて部誌として発行しています。部誌の発行は年に2回行っていて、配布もしています。

また、ゴールデンウィーク明けと松ヶ崎祭中にパネル展開催も行っています。パネル展ではモチーフ、画風、画材などがそれぞれの絵によっても異なるので、ここでは部員たちの様々な絵を楽しむことができます。

部室にはクロッキー帳があって、部員たちが暇なときに描きこんだりしています。これは漫画研究部の日々の重要な活動の一つです。このクロッキー帳によって部員は切磋琢磨し合い、己を高めています。

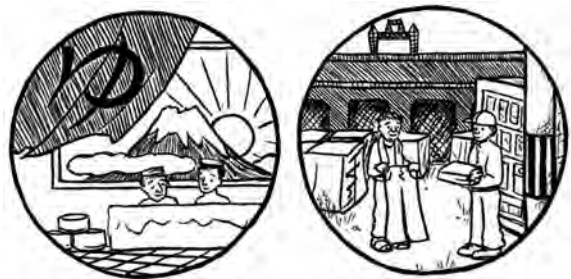
部員は全員で22名、これからも私たちは絵を通して様々な活動を繰り広げてまいります。



ボランティアサークル

部長 橋本 真悠
(デザイン経営工学課程 4回生)

私たちボランティアサークルでは、月1・2回の活動を通して、「やりたいことをする」という考えのもと、各自が興味のあるボランティアに参加しています。活動としては、毎月第1日曜日には京都ライトハウスにて視覚障害者の方とのコーラス活動を、第4土曜には東山区の銭湯にて障害者の方への入浴補助活動を行なっています。また、年に数回は大阪の西成区にてホームレスの人々への炊き出し活動や、ゴミ拾いも行なっており、分野にとらわれない幅広い活動を展開しています。これからも、部員一丸となって、様々な活動に取り組んでいきたいと思えます。



剣道部

主務 東 琢哉
(造形工学課程 2回生)

私たち剣道部は、部員15人、マネージャー4人で週4回、武道場で活動しています。昨年度は、粒ぞろいの一回生3人の入部により、部活全体がより活気づく年となりました。部員同士がお互いに良い刺激を与え合い、先生先輩方の熱心な指導のもと、充実した稽古とともに日々精進しています。

一回生の活躍もあり、一昨年の三織優勝に引き続き昨年も見事三織優勝を勝ち取ることが出来ました。しかし、昨年の目標であった三織、六工両方の優勝は果たせなかったため、今年こそはそれを達成し、歴史に残る代になりたいと思います。そのためにもより一層努力を惜しまず、真剣に稽古に、また新入部員獲得にも気合いを入れて取り組んでいきたいと思っています。



ソフトテニス部

部長 池上将宏
(応用生物学課程 2回生)

私たちは現在、学期中は週3、休業期間中は週4の割合で活動しております。構成部員は二回生が6名、一回生が15名の計21名(男子17名、女子4名)です。主な活動といたしまして、昨年のシーズン中には毎年恒例であります、近六、近国、三織に加えまして、昨年、記念すべき第一回大会を迎えました、全日本国立大学対抗戦にも参加させて頂きました。そして、9月のリーグ戦(男子)では、六部Cにて優勝、六部Bに昇格致しました。交流試合と致しまして、こちらも恒例であります、OB会、村田製作所戦も大いに盛り上がる、楽しい会でありました。

これからも地道に活動してまいりますので、よろしくお願い致します。

最後に、ソフトテニス部を今に残して下さった、OBの方々、心から感謝しております。部員一同、お待ちしておりますので、ぜひ、OB会の機会にご足労賜われますよう、よろしくお願い致します。



バドミントン部

部長 森 亮太
(物質工学課程 2回生)

私たちバドミントン部は、現在11人で活動しています。全員一丸となりリーグ昇格を目標に、日々の練習に励んでいます。女子は昨年度、4部昇格を目指しましたが、惜しくも5部残留。男子は秋季リーグで健闘し、5部昇格という念願を果たしました。

また、昨年度はOB,OGの方からのご支援で初めて部旗を作らせて頂きました。この場を借りて御礼申し上げます。

バドミントン部はリーグだけでなく、新入生歓迎会、三織、OB会、夏合宿、松ヶ崎祭、年数回ある個人戦などいろいろな行事があります。昨年度は多くのOB、OGの方々に参加して頂き、大変嬉しく思いました。これからもよりいっそう交流を深めたいと思っています。

今年度は、さらに厳しい戦いになりますが、工織バドミントン部、リーグ昇格を目指し練習していきますので、OB,OGをはじめ、みなさま方の変な声援、ご指導をよろしくお願い致します



ワンダーフォーゲル部

部長 橋爪 雅史
(造形工学課程 3回生)

私たちワンダーフォーゲル部は現在約20名の部員で定期的に土日の週末を使い登山活動を行っています。夏には恒例となっている夏合宿を行い、今年は近年に比べて参加者も多かったため隊を三隊に分け、それぞれのルートで北アルプスを縦走しました。

また、部の宝となっている皆子山の山小屋では例年の補修作業の折に山小屋建設当時のOBの方にもご参加頂き、大変貴重なお話を聞くことができました。改めてこの部活動の歴史の長さを感じ、またそれを今後も守っていきたく思いました。

まだまだ知識、経験ともに未熟な私たちですが機会があればご指導、ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。



会員の受賞

- 本学名誉教授木村光佑氏に、平成24年11月3日付けで瑞宝中綬章が授与されました。
- 本学名誉教授荒木長男氏に、平成24年11月3日付けで瑞宝中綬章が授与されました。
- 本学名誉教授中山純一氏は、平成24年9月12日付けでエレクトロニクスソサイエティ招待論文賞を受賞されました。

教員の受賞

所属	職名	氏名	受賞名	授与機関	受賞日
情報工学部門	教授	寶珍 輝尚	日本情報考古学会賞を受賞	日本情報考古学会	平成24. 3.24
機械システム工学部門	教授 教授 准教授 准教授 助教	太田 稔 森西 晃嗣 北川 石英 山川 勝史 小野 裕之	日本機械学会教育賞を受賞(グループ受賞)	日本機械学会	平成24. 4.20
生体分子工学部門	助教	熊田 陽一	生物工学奨励賞(照井賞)を受賞	公益社団法人日本生物工学会	平成24. 6. 8
高分子機能工学部門	教授	堤 直人	高分子学会三菱化学賞を受賞	公益社団法人高分子学会	平成24. 9.20
デザイン経営工学部門	教授 助教	藤戸 幹雄 木谷 庸二	グッドデザイン賞2012をグループ受賞	公益財団法人日本デザイン振興会	平成24.10. 1
応用生物学部門	准教授	片岡 孝夫	平成24年度「科研費」審査委員の表彰を受けた	独立行政法人日本学術振興会	平成24.10.31
物質工学部門	教授	中 建介	平成24年度「科研費」審査委員の表彰を受けた	独立行政法人日本学術振興会	平成24.10.31
応用生物学部門	教授	森 肇	貞明皇后記念蚕糸科学賞を受賞	財団法人大日本蚕糸会	平成24.11. 2
機械システム工学部門	助教	山口 桂司	砥粒加工学会優秀講演賞を受賞	公益社団法人砥粒加工学会	平成24.11.16

教員の異動

平成25年4月1日現在

所属	職名	氏名	備考
生体分子工学部門	教授	清水 正毅	平成24年5月1日 採用
生体分子工学部門	教授	亀井 加恵子	平成24年5月1日 昇任
建築造形学部門	准教授	高木 真人	平成24年5月1日 昇任
生物資源フィールド科学研究センター	教授	秋野 順治	平成24年7月1日 昇任
研究推進本部	教授	松室 寛治	平成24年7月12日 採用 任期は平成29年7月11日までとする
建築造形学部門	准教授	清水 重敦	平成24年9月1日 採用
高分子機能工学部門	助教	中西 英行	平成24年10月1日 採用 任期は平成29年9月30日までとする
物質工学部門	教授	若杉 隆	平成24年12月1日 昇任
物質工学部門	教授	今野 勉	平成24年12月1日 昇任
建築造形学部門	講師	岩本 馨	平成25年3月1日 昇任 任期は平成30年2月28日までとする
デザイン学部門	助手	村山 加奈子	平成25年3月16日 採用 任期は平成30年3月15日までとする
高分子機能工学部門	教授	浦山 健治	平成25年4月1日 採用
生物資源フィールド科学研究センター	准教授	堀元 栄枝	平成25年4月1日 採用
言語・文化部門	准教授	Healy, Sandra	平成25年4月1日 採用

所 属	職 名	氏 名	備 考
高分子機能工学部門	教授	田 中 克 史	平成25年4月1日 昇任
電子システム工学部門	准教授	上 田 哲 也	平成25年4月1日 昇任
電子システム工学部門	准教授	山 下 兼 一	平成25年4月1日 昇任
デザイン経営工学部門	准教授	木 谷 庸 二	平成25年4月1日 昇任
環境科学センター	助教	布 施 泰 朗	平成25年4月1日 昇任 任期は平成30年3月31日までとする
デザイン経営工学部門	准教授	城戸崎 和 佐	平成24年5月31日 退職
電子システム工学部門	教授	尾 江 邦 重	平成25年8月31日 退職
高分子機能工学部門	教授	秋 山 隆 一	平成25年3月31日 定年退職
高分子機能工学部門	教授	伊 藤 孝	平成25年3月31日 定年退職
高分子機能工学部門	教授	高 橋 雅 興	平成25年3月31日 定年退職
バイオベースマテリアル学部門	教授	木 村 良 晴	平成25年3月31日 定年退職
デザイン学部門	教授	福 田 民 郎	平成25年3月31日 定年退職
建築造形学部門	教授	森 田 孝 夫	平成25年3月31日 定年退職
言語・文化部門	教授	酒 井 謙 一	平成25年3月31日 定年退職
建築造形学部門	准教授	岡 田 康 郎	平成25年3月31日 定年退職
電子システム工学部門	准教授	堤 喜代司	平成25年3月31日 定年退職

平成24年度 博士学位取得者と学位論文題名

○課程修了によるもの（課程博士）

（平成24年9月25日授与）

申 請 者	論 文 題 目
NGUYEN TU ANH THI (ぐえんとあん てい)	<i>Drosophila</i> as a model for studying function of <i>Dual</i> oxidase gene and for screening of its bioavailable inhibitors and antioxidants
NGUYEN TRONG TUAN (ぐえんとろん とうあん)	Chemical communication in Japanese subterranean termite <i>Reticulitermes speratus</i> (Isoptera : Rhinotermitidae)
市橋 一郎 (いちはし いちろう)	実地震波の時間周波数特性を有する模擬地震波による弾塑性履歴系の最大変位のばらつきに関する研究
寺本 健三 (てらもと けんぞう)	狩野尚信の画業からみた江戸狩野成立の研究
THITITHANASARN SMITH (ていていたなざーん すみす)	Development of Thermal Resistance in Natural Fiber Reinforced Engineering Thermoplastic Composites

○論文提出によるもの（論文博士）

（平成24年9月25日授与）

申 請 者	論 文 題 目
弓永 久哲 (ゆみなが ひさのり)	脳血管障害患者の麻痺側上肢連合反応に関する基礎研究—誘発筋電図 F 波における検討—
中村 顕輔 (なかむら けんすけ)	B-spline 曲面を用いた体形モデルの応用およびその特長を継承するポリゴンモデルの展開

○課程修了によるもの（課程博士）

（平成25年3月25日授与）

申請者	論文題目
坪井 智也 (つぼい ともや)	Promotion of Polymer Crystallization and Phase Control of Polymer Crystal by Using Nucleating Agents
森田 晶子 (もりた しょうこ)	The blood-brain communication by the circumventricular organs
石本 聖明 (いしもと きよあき)	Synthesis and Properties of Biobased Polymers Derived from Lactic Acid Macromonomers
北澤 大志 (きたざわ だいし)	Cell biological and genetic studies on dynamics of cellular structures during male meiosis in <i>Drosophila</i>
HUYNH NGOC CHAU (ふいん ごっく ちゃう)	Preparation of Dicarboxylic Acid-Type Gemini by Oxidation of Carbon-Carbon Double Bonds and by Acidolysis
藤原 俊介 (ふじわら しゅんすけ)	Identification of the <i>warts</i> and <i>basket</i> genes as novel targets of the <i>Drosophila</i> DRE/DREF transcriptional regulatory system
古屋 和行 (ふるや かずゆき)	新規選択的アンドロゲン受容体調節剤(SARM)S-101479の創製と組織選択性メカニズムの解析
別府 佳紀 (べつぷ よしのり)	乳酸菌の菌体外に産生する自律神経活動調節物質に関する研究
深津 杏樹 (ふかつ きょうじゅ)	偏光顕微ラマン分光分析を用いた部分安定化ジルコニアの相変態メカニズムの解明
HO VAN THAO (ほー ばん たお)	Studies on Bacterial γ -Glutamyltranspeptidase for Food Application and Its Heat Stability
瀬川 雅也 (せがわ まさや)	ストレス印加による人工心肺装置用ポンプチューブの構造変化と表面析出物のキャラクタリゼーション
竹内 誠一 (たけうち せいいち)	火災の乱流変動が炉内放射伝熱に及ぼす影響の吸収線データベースに基づく検討
田原 樹 (たはら たつき)	並列デジタルホログラフィにおける計測範囲の広域化と顕微鏡応用および多次元イメージングへの拡張
JIRATANATITEENUN ALIYAAPON (じらたなていていなん ありやぽん)	A Comparative Study of Street Fashion Dynamics in Japan, Korea, and Thailand
鈴木 在乃 (すずき あるの)	居住空間の異文化理解：留学生の生活および学習環境に関する研究
奥井 素子 (おくい もとこ)	尾形光琳における俵屋宗達の継承について
三宅 拓也 (みやけ たくや)	近代日本における物産・商品陳列施設に関する史的・研究
高木 光朗 (たかぎ みつろう)	連続繊維強化熱可塑性樹脂複合材料用繊維状中間材料の開発および応用
DEMIRCAN OZGUR (でみりちゃん おずぐる)	MANUFACTURING, MODELING AND MECHANICAL CHARACTERIZATION OF INNOVATIVE BI-AXIAL WEFT KNITTED COMPOSITES
横溝 勝行 (よこみぞ かつゆき)	ポリプロピレン射出成形品のウェルド界面の構造と物性に関する研究

○論文提出によるもの（論文博士）

（平成25年3月25日授与）

申請者	論文題目
片桐 敏文 (かたぎり としふみ)	Functionalization and Electronic Device Applications of Thiophene-Based Semiconducting Oligomers
鳥宮 尚道 (とりみや なおみち)	デザイン支援のための概念把握手法に関する研究

卒業生・修了生の就職先・進学先

(平成24年度 進路先内定状況一覧)

(☆印は進学先を示す)

工芸科学部

学生サービス課就職支援室

(H25. 2.28現在)

応用生物学課程

企業名等	人数	企業名等	人数	企業名等	人数	企業名等	人数
イーアンド(株)	1	ジョー・プリンス竹下(株)	1	マエタ薬品商事(株)	1	明治安田生命保険相互会社	1
(株)B&P	1	(株)中村農園	1	(株)ミルボン	1	☆京都工芸繊維大学	34
☆京都大学	1	☆総合研究大学院大学	1	☆新潟大学	1		

生体分子工学課程

イービーエス(株)	1	イオンリテール(株)	1	日本コントロールシステム(株)	1	(株)東京ゼロレーベル	1
☆京都工芸繊維大学	36	☆京都大学	3				

高分子機能工学課程

(既職)東レ(株)	1	三甲(株)	1	静岡県農業協同組合中央会	1	日栄化工(株)	1
丸紅ブラックス(株)	1	☆京都工芸繊維大学	42	☆京都大学	3		

物質工学課程

(財)近畿健康管理センター	1	MARUWA MALAYSIA	1	京都府 教員	1	東洋紡(株)	1
(株)メイワボックス	1	☆京都工芸繊維大学	61	☆東京工業大学	1	☆大阪大学	1
☆京都大学	5	☆奈良先端科学技術大学院大学	1				

電子システム工学課程

オムロンオートモーティブエレクトロニクス(株)	1	川崎重工(株)	1	京都市	1	ダイキン工業(株)	1
西日本旅客鉄道(株)	1	日東電工(株)	1	日本電産シンボ(株)	1	枚方市	1
(株)エスタンイン京都	1	☆京都工芸繊維大学	42	☆京都大学	3	☆奈良先端科学技術大学院大学	2
☆東京大学	1	☆大阪大学	2				

情報工学課程

応用電機(株)	1	(株)フォアキャスト・コミュニケーションズ	1	富士通(株)	1	(株)島津ビジネスシステムズ	1
(株)三菱東京UFJ銀行	1	☆京都工芸繊維大学	39	☆京都大学	4	☆奈良先端科学技術大学院大学	4

機械システム工学課程

IMV	1	TOTO(株)	1	小原歯車工業(株)	1	川崎重工(株)	1
京セラ(株)	1	京都府 教員	1	京都府 警察	1	近畿車輛(株)	1
住友ゴム工業(株)	1	タカタ(株)	1	中外炉工業(株)	1	東海旅客鉄道(株)	1
トヨタ自動車(株)	1	日本コンベヤ(株)	1	日本特殊陶業(株)	1	光洋機械工業(株)	1
本田技研工業(株)	1	渡辺商店	1	(株)NTT ファシリティーズ関西	1	(株)岡村製作所	1
(株)シーヴィテック	1	(株)ジェイテクト	1	(株)椿本チエイン	1	(株)寺内製作所	1
(株)ユー・ピー・ディー	1	☆京都工芸繊維大学	61	☆京都大学	3		

デザイン経営工学課程

Meiji Seika ファルマ(株)	1	NEC ソフト(株)	1	エレコム(株)	1	個人事業主	1
セキスイハイム山陽(株)	1	三重県	1	(株)LIXIL	2	(株)穴吹ハウジングサービス	1
(株)オリバー	1	(株)西松屋チェーン	1	(株)富士通アドバンスソリューションズ	1	(株)口マンス小杉	1
(株)ワークスアプリケーションズ	1	INDIGO BLUE	1	京都科学	1	ケセラセラ	1
エンゼルブレインカード	1	☆京都工芸繊維大学	16				

造形工学課程

(独)都市再生機構	1	旭化成ホームズ(株)	1	岡山市	1	京都府	1
三精輸送機(株)	1	清水建設(株)	1	住友不動産(株)	1	セキスイハイム山陽(株)	1
積水ハウス(株)	2	太陽企画(株)	1	大和ハウス工業(株)	1	ダイワラクダ工業(株)	1
高松建設(株)	1	新潟市	1	日本サード・パーティ(株)	1	日本総合住生活(株)	1
日本放送協会	1	パナホーム(株)	1	ミサワホーム近畿(株)	1	(株)NHK エデュケーションナル	1
(株)遠藤照明	1	(株)木の家専門店谷口工務店	2	(株)クマヒラ	1	(株)竹中工務店	2
(株)ニトリ	1	(株)ベクトル・ジャパン	1	(株)ミマキエンジニアリング	1	日立保険サービス	1
☆京都工芸繊維大学	49	☆九州大学	1	☆京都大学	4	☆北海道大学	1
☆横浜国立大学	1	☆早稲田大学	1	☆東京大学	1	☆神戸大学	1

先端科学技術課程

MMC リョウテック(株)	1	大阪精工(株)	1	大阪府 教員	1	京都電子計算(株)	1
京阪電気鉄道(株)	1	トヨタ自動車(株)	1	(株)大阪ガスファシリティーズ	1	(株)グラフィック	1
(株)プロテラス	1	(既職)エース設計産業(株)	1	☆京都工芸繊維大学	9	☆奈良先端科学技術大学院大学	4

大学院工芸科学研究科博士前期課程

応用生物学専攻

企業名等	人数	企業名等	人数	企業名等	人数	企業名等	人数
TANAKA ホールディングス(株)	1	大塚食品(株)	1	小野薬品工業(株)	2	川本産業(株)	1
環境衛生薬品(株)	1	京都府 教員	1	京都府	1	クオリカ(株)	1
神戸大学 職員	1	コタ(株)	1	三栄源エフ・エフ・アイ(株)	1	滋賀県 教員	1
大日本住友製薬(株)	1	高見(株)	1	トーマツイノベーション(株)	1	鳥越製粉(株)	1
長瀬産業(株)	1	日清食品(株)	1	日本水産(株)	1	ピース(株)	1
堀川化成(株)	1	丸大食品(株)	1	三井農林(株)	1	森下仁丹(株)	1
山崎製パン(株)	1	六甲バター(株)	1	(株)ウエ・ルコ	1	(株)エムティーアイ	1
(株)カネカ	1	(株)国大セミナー	1	(株)西利	1	(株)ハイテック	1
(株)ブルボン	1	(株)毎日新聞社	1	(株)マルハニチロホールディングス	1	(株)マンダム	1
(株)リニカル	1	☆京都工芸繊維大学	1				

生体分子工学専攻

DIC(株)	1	Meiji Seika ファルマ(株)	1	荒川化学工業(株)	1	石原産業(株)	1
花王(株)	1	カンロ(株)	1	ザンスター(株)	1	山八歯材工業(株)	1
三洋化成工業(株)	1	太陽社電気(株)	1	帝人(株)	1	テルモ(株)	1
東洋アルミニウム(株)	1	東洋紡(株)	1	東和薬品(株)	1	日本ペイント(株)	1
マツイカゴク(株)	1	マルホ(株)	1	(株)大阪ミツカン 三木工場	1	(株)資生堂	1
(株)千趣会	1	(株)フジインコーポレーテッド	1	(株)ユーシン精機	1	☆京都工芸繊維大学	1

高分子機能工学専攻

DIC(株)	1	JSR(株)	1	TMT マシナリー(株)	1	旭化成(株)	1
川崎化成工業(株)	1	グンゼ(株)	1	住友ゴム工業(株)	1	積水化学工業(株)	3
ゼネラル(株)	1	大日本スクリーン製造(株)	1	シャチハタ(株)	1	日本ペイント(株)	2
古河 AS(株)	1	三菱樹脂(株)	1	村田機械(株)	1	レジノカラー工業(株)	1
(株)NTT ドコモ	1	(株)滋賀富士通ソフトウェア	1	(株)島津製作所	1	(株)東芝	1
☆京都工芸繊維大学	3						

物質工学専攻

JNC(株)	1	KISCO(株)	1	WDB エウレカ(株)	1	YKK(株)	1
アイカ工業(株)	1	荒川化学工業(株)	1	関西電力(株)	1	カンボウプラス(株)	1
京セラ(株)	1	キンセイマテック(株)	1	クオリカブス(株)	1	ケイミュー(株)	1

企業名等	人数	企業名等	人数	企業名等	人数	企業名等	人数
コスモ石油(株)	1	三京化成(株)	1	サンスター(株)	1	新日鐵住金(株)	2
積水化学工業(株)	1	積水樹脂(株)	1	第一工業製薬(株)	1	ダイキン工業(株)	1
タカラスタンダード(株)	1	タカラベルモント(株)	1	多木化学(株)	1	東洋インキ SC ホールディングス(株)	1
東洋ゴム工業(株)	1	東洋紡(株)	1	奈良県	1	ニチアス(株)	1
日油(株)	1	ニッタ(株)	1	日鉄住金エレクトロデバイス(株)	2	日本エンバイロケミカルズ(株)	1
日本コルマー(株)	1	日本特殊陶業(株)	1	日本バルカー工業(株)	1	日本ペイント(株)	1
日本モレックス(株)	1	藤本化学製品(株)	1	北斗特許事務所	1	マツイカガク(株)	1
ユニチカ(株)	1	ローム(株)	1	(株)MORESCO	1	(株)コーアツ	1
(株)島津製作所	1	㈱ネオス	1	(株)ノザワ	1	(株)ノリタケカンパニーリミテド	1
(株)松風	1	(株)松永製作所	1	☆京都工芸繊維大学	1		

電子システム工学専攻

TDK(株)	1	関西電力(株)	3	栗田工業(株)	1	スズキ(株)	1
ソニー(株)	1	タイムガー魔法瓶(株)	1	ダイハツ工業(株)	1	東海旅客鉄道(株)	1
トヨタ自動車(株)	1	ニチコン(株)	1	日本共産党 京都府委員会	1	日本電産(株)	1
パナソニック(株)	1	光洋サーモシステム(株)	1	富士ゼロックス(株)	1	富士通(株)	1
富士通(株)	1	ブラザー工業(株)	1	三菱電機エンジニアリング(株)	1	三菱電機(株)	2
村田機械(株)	1	ローム(株)	1	(株)アキュラホーム	1	(株)エネゲート	1
(株)島津製作所	1	(株)ニコン	1	(株)堀場製作所	2	(株)村田製作所	1
(株)リコー	1	☆京都工芸繊維大学	1				

情報工学専攻

KDDI(株)	1	NEC フィールドディング(株)	1	NTT ソフトウェア(株)	1	オムロンソーシアルソリューションズ(株)	1
オムロンソフトウェア(株)	1	オムロン(株)	1	関電システムソリューションズ(株)	1	キヤノン(株)	1
京セラコミュニケーションシステム(株)	1	京セラドキュメントソリューションズ(株)	1	グリーン(株)	1	住友電工情報システム(株)	1
大日本スクリーン製造(株)	1	トヨタ自動車(株)	1	中日本高速道路(株)	1	日本精工(株)	1
日本電気航空宇宙システム(株)	1	パナソニック(株)	1	三菱電機コントロールソフトウェア(株)	1	三菱電機マイコン機器ソフトウェア(株)	1
三菱電機(株)	1	(株)NTT データ MSE	1	(株)SRD	1	(株)STNet	1
(株)インテック	1	(株)エヌ・ティ・ティ・ドコモ	1	(株)カブコン	1	(株)キューブシステム	1
(株)ケイ・オプティコム	2	(株)ジャステック	1	(株)ジャノメクレディア	1	(株)テクノサイト	1
(株)日新システムズ	1	(株)堀場製作所	1	(株)村田製作所	1	(株)リコー	1
☆京都工芸繊維大学	2						

機械システム工学専攻

YKK(株)	1	川崎重工業(株)	1	キヤノンマシナリー(株)	1	コニカミノルタホールディングス(株)	1
サンコール(株)	2	参天製薬(株)	1	住友ゴム工業(株)	1	ダイキン工業(株)	2
大東化学(株)	1	大日本スクリーン製造(株)	1	ダイハツディーゼル(株)	1	中外炉工業(株)	1
デンソーテクノ(株)	1	東芝ライテック(株)	1	日産自動車(株)	1	パスカル(株)	1
パナソニック(株)	3	日立オートモティブシステムズ(株)	1	日立造船(株)	1	富士重工業(株)	1
豊和工業(株)	1	マツタ(株)	1	三菱自動車工業(株)	1	三菱電機(株)	4
ヤンマー(株)	1	(株)KCM	1	(株)アドヴィックス	1	(株)エクセディ	1
(株)大阪真空機器製作所	1	(株)クボタ	1	(株)神戸製鋼所	2	(株)小松製作所	1
(株)竹中工務店	1	(株)ツバキエマソン	1	(株)デンソー	1	(株)東芝	1
(株)豊田自動織機	1	(株)パイロットコーポレーション	1	(株)ファンフィールド	1	(株)マキタ	1
☆京都工芸繊維大学	3						

デザイン経営工学専攻

イオンリテール(株)	1	コクヨ(株)	1	三機工業(株)	1	タカラスタンダード(株)	1
名古屋電機工業(株)	1	リリカラ(株)	1	(株)softdevice	1	(株)アイシーエル	1
(株)インテック	1	(株)内田洋行	1	(株)岡村製作所	1	(株)ダイセキ	1
(株)日立製作所	1	(株)三橋製作所	1				

造形工学専攻

(独)造幣局	1	ATELIER-ASH 矢田朝士	1	岡山県	1	京都府	1
奈良県	1	(株)石本建築事務所	1	(株)市原亀之助商店	1	(株)高松コンストラクショングループ	1
(株)能勢建築構造研究所	1	(株)乃村工芸社	1	(株)平成建設	1	☆京都工芸繊維大学	3

デザイン科学専攻

三甲(株)	1	河淳(株)	1	グリーン(株)	1	シャープ(株)	1
凸版印刷(株)	1	任天堂(株)	1	三菱自動車工業(株)	1	ローランド D.G.(株)	1
(株)イトーキ	1	(株)コンセント	1	(株)電通	2	(株)ネイムス	1

建築設計学専攻

(株)竹中工務店	2	JR 西日本コンサルタンツ(株)	1	浅井謙建築研究所(株)	1	上海万谷建築設計有限公司	1
高島屋スペースクリエイティブ(株)	1	戸田建設(株)	1	東日本旅客鉄道(株)	1	(株)アール・アイ・エー	1
(株)大林組	1	(株)昭和設計	1	(株)日本設計	4	(株)乃村工芸社	1
(株)東畑建築事務所	1	(株)リビタ	1				

先端ファイブ科学専攻

(既職) Myanmar Textile Industries Ministry of Industry Naypyidaw Myanmar	1	(既職) 大東市議会	1	(既職) B-Bridge International, Inc.	1	(既職) デザイナー	1
(既職) (株)エイチ・イン・ソリューション	1	(既職) ㈱平和化学工業所	1	(既職) ㈱丸忠	1	TMT マシナリー(株)	2
関電プラント(株)	1	京セラドキュメントソリューションズ(株)	1	クボタシーアイ(株)	1	鈴木金属工業(株)	1
住友化学(株)	1	住友ゴム工業(株)	1	住友重機械工業(株)	1	東和薬品(株)	1
日新電機(株)	1	日清紡ホールディングス(株)	1	三菱電機プラントエンジニアリング(株)	1	三菱電機(株)	1
(株)LIXIL	1	(株)カネカ	1	(株)宮崎銀行	1	☆京都工芸繊維大学	5
☆岐阜大学	1						

バイオベースマテリアル学専攻

第一工業製薬(株)	1	東洋紡(株)	2	ニッタ(株)	1	日本特殊陶業(株)	1
パネフリ工業(株)	1	日立造船(株)	1	(株)呉竹	1	(株)クレハ	1
(株)島津製作所	1	(株)ミルボン	1	(株)ワールドインテック	1	京セラ(株)	1
互応化学工業(株)	1	住友ゴム工業(株)	1	☆京都工芸繊維大学	1		

大学院工芸科学研究科博士後期課程

生命物質科学専攻

企業名等	人数	企業名等	人数	企業名等	人数	企業名等	人数
(既職) Can Tho University, Dep. Of Chemistry 教員	1	(既職) 花王(株)	1	(既職) 科研製薬(株)	2	(既職) サントリーホールディングス(株)	1
(既職) 社会保険京都病院	1	(既職) 東洋紡(株)	1	(独) 日本原子力研究開発機構(ポスドク)	1	Rajamangala University of Technology Thanyaburi	1
環境衛生薬品(株)	1	国際衛生(株)	1	(株)シー・エス・エス	1	(株)ナリス化粧品	1

設計工学専攻

(既職) 滋賀県警察本部科学捜査研究所	2	(既職) 兵庫県警察本部科学捜査研究所	1	関西大学 教員	1	(既職) 京都医療科学大学教員	1
(既職) 三菱電機(株)	1	(既職) コクヨファニチャー	1				

造形科学専攻

(既職) 建築ジャーナル	1	(独) 奈良文化財研究所	1				
--------------	---	--------------	---	--	--	--	--

先端ファイブ科学専攻

(既職) カジレーネ(株)	1	(既職) 京都光華女子大学 教員	1	(既職) 小松精練(株)	1	(既職) 三晶(株)	1
(既職) 新和産業(株)	2	(既職) 住友化学(株)	1	(既職) 中国電子ジャパン(株)	1	オーミケンシ(株)	1
(既職) 田勇機業(株)	1	(既職) 日本ポリケム(株)	1	(既職) ㈱仁科旗金具製作所	1	(既職) ひなや	1

■ 年会費等の納入について

1. 会費の役割等について

- (1) 「KIT 同窓会」は、会員相互の交流と親睦を図り、もって母校の発展、学術文化及び産業の振興に寄与することを目的とし、会員の皆様方からの年会費のほか、寄付金(賛助金)等により、「KIT 同窓会」の充実・発展・運営・活動を実行して参ります。このことは本会のみならず、母校への強い支援になります。今後とも会員の皆様方のご支援・ご協力をお願いします。
- (2) 平成22年度から、「年額制」(3,000円)に加え「終身会費制」(30,000円)が導入されました。
- (3) 平成25年度から前納による割引制度は廃止されました。複数年の払込は、3,000円の整数倍をお振込下さい。
- (4) 新同窓会設立(平成18年度)以後に納入された年会費を終身会費額に至る一部としてカウントしております。
- (5) 長期間にわたり会費未納の会員の方は何卒会費納入にご協力のほどよろしくお願いいたします。

2. 納入を確認する方法

- (1) 終身会費制が導入されたことに伴う平成18年度以降の年会費納入済額については、直接事務局にお問い合わせください。
- (2) 平成25年度年会費及び終身会費が納入済の方には、会費納入の振込用紙は、同封しておりません。

3. 終身会費納入済の方

終身会費が納入済みの方は、氏名に「☆」マークを付しております。また、平成25年度以降の会費納入済の再掲載は省略しております。

4. 旧工芸学部同窓会(京都工大会)、旧繊維学部同窓会(衣笠同窓会)との関係につきまして

京都工大会は解散し、一方、衣笠同窓会は本同窓会の部会となりました。このため、KIT 同窓会へは新たに会費を納入して頂きますよう重ねてお願い申し上げます。衣笠同窓会の会費(終身会費)はKIT 同窓会の部会活動のためのものです。

KIT 国際学術交流クラブのご案内

KIT 国際学術交流クラブ(KIT International Academic Exchange Club)は、本学に在学する留学生や卒業生、国際訪問研究員、交流協定校の教職員など多くの方々により組織されている世界的なネットワークです。2012年9月1日現在の会員数は、45カ国からの450名にのぼり、約20名の日本人卒業生の方も含まれています。

◆アジア5か所にキーステーション

2007年度には、本クラブの活動を効果的に推進し、本学の情報発信と元留学生ネットワークを形成する拠点として、中国(上海)、韓国、台湾、ベトナム、タイの5か所に本クラブのキーステーションを設けました。本学卒業生(元外国人留学生)がその代表(チェア)となり、各地に在住する卒業生同士の交流の機会を設けたり、日本への留学を考える学生へ情報提供を行うなど、様々な面で本学との橋渡しを行ってくださっています。

キーステーションの所在地とチェアは以下のとおりです。

- ・ 中国(上海)：呉軍氏
(1997年電子情報工学専攻修了)
- ・ 韓国：具剛氏
(1993年材料科学専攻修了)
- ・ ベトナム：Ta Thanh Van 氏
(1999年材料科学専攻修了)
- ・ タイ：Saikwan Trisunan 氏
(1995年応用生物学科卒業)
- ・ 台湾：羅吉平氏
(1992年造形工学専攻修了)



2012年7月に台北で開催された日本留学フェア
元外国人留学生の皆さんがご協力くださいました。

◆日本人卒業生の方もご入会ください！

卒業生の皆様、国籍を問わず、幅広く本クラブへのご入会をお待ちしております。

特に、キーステーション所在国・地域にお住まいの方は、ぜひキーステーションにご参加ください。現地での国籍を超えた様々な交流の機会がもたらされることでしょう。

また、お知り合いの本学卒業生に在外勤務の方がおられましたら、本クラブとキーステーションについてお伝えください。

◆入会のご連絡、お問い合わせ

入会手続きやキーステーションへ連絡を取りたい場合など、お気軽にご連絡ください。

国際企画課国際交流係

電話 075-724-7129

E-mail : kokusai@jim.kit.ac.jp



2012年9月にバンコクで交流会を開催
バンコクに住むタイ人と日本人の卒業生が集まり、古山学長を囲んで懇談しました。

東海支部主催行事 参加のお願い

本誌16ページにもありますように京都工大会東海支部は平成24年12月1日より、KIT 同窓会東海支部として新たに活動を開始しました。本会の存在をご存じない方には是非ご参加いただきたいと思っております。東海支部は、皆様からの年会費は徴収していません。総会・懇親会にご出席の時の参加費と本部から援助を受けている「支部等支援金」で活動しています。

今年の総会・懇親会は11月30日に名古屋駅前「ウインクあいち」での開催を予定しています。まずは、案内状を送るためのメールアドレス、または住所を下記にて先までご連絡ください。皆様のご参加をお待ちしています。

記

KIT 同窓会東海支部事務局 野崎駿吉
(窯業工芸学科昭和44年卒)

E-mail アドレス shunkich@coda.ocn.ne.jp

住所 〒466-0826

名古屋市昭和区滝川町47-147-3-401

KIT ゴルフ会コンペ の開催と会員募集

KIT ゴルフ会会員募集

京都工芸繊維大学の同窓生、また職員の方も含め会員を募集いたします。

年2回のコンペを実施しています。

会長は坪井弘光氏、副会長土井健司氏
(現在会員100名程度です。)

連絡先は下記幹事までお願いします。

幹事：森橋俊文 電話：090-3266-6094

谷垣弘明 電話：090-5152-5824

今回は平成25年10月17日(木)瀬田ゴルフコースの予定です。

卒業証明書等の申し込みについて

各種証明書の申込みは、郵送又は学務課窓口で受け付けています。

●郵送での申込み方法

以下の3点を同封し、封筒に「証明書発行願在中」と朱書きのうえ、郵送してください。

①証明書発行願(以下の事項を記入してください)

・氏名(フリガナ)

・生年月日

・出身学部、課程・学科/出身研究科・専攻

・入学年月、卒業(修了)年月

・学籍番号(不明の場合省略可)

・必要な証明書の種類と部数(例：卒業証明書 和文1部)

・使用目的、提出先

・現住所、連絡先の電話番号・メールアドレス

②本人確認書類(運転免許証など)のコピー

③返信用封筒(送付先の住所・氏名を明記し、切手を貼ってください)

※申込方法の詳細及び「証明書発行願」様式は、大学HPに掲載しています。

京都工芸繊維大学ホームページ

<http://www.kit.ac.jp/>

[トップページ<対象者別メニュー：卒業生の方<証明書の申し込みについて]

●送付・問い合わせ先

〒606-8585 京都市左京区松ヶ崎橋上町1

京都工芸繊維大学

学務課学務企画室学務調査係 宛

TEL：075-724-7117

編集委員

(※本号編集委員長)

理事 蔭山 薫 養蚕学科 昭和39年卒

理事 ※森 肇 蚕糸生物学科 昭和57年卒
応用生物学部門教授

事務局 志賀 均 KIT ビューロー

事務局 荒木克己 KIT ビューロー

■ 表紙デザインについて

デザインさせて頂く際に最初に思いましたことは、若き日の学生時代に学んだこと、想ったこと、感じたこと… それらは、同窓生それぞれの人生に於いていろいろな意味で基盤を成しているということです。

それらは、卒業後何十年も意識の下に眠り、ある局面に遭遇したときにふと活動の水面に浮かび上がって来るようなものなのかも知れません。

これらは、具体的な意味をもった対象やカタ

チの場合もあれば、充滿している空気や感触のようなものとなって定着していることであろうかと思われま

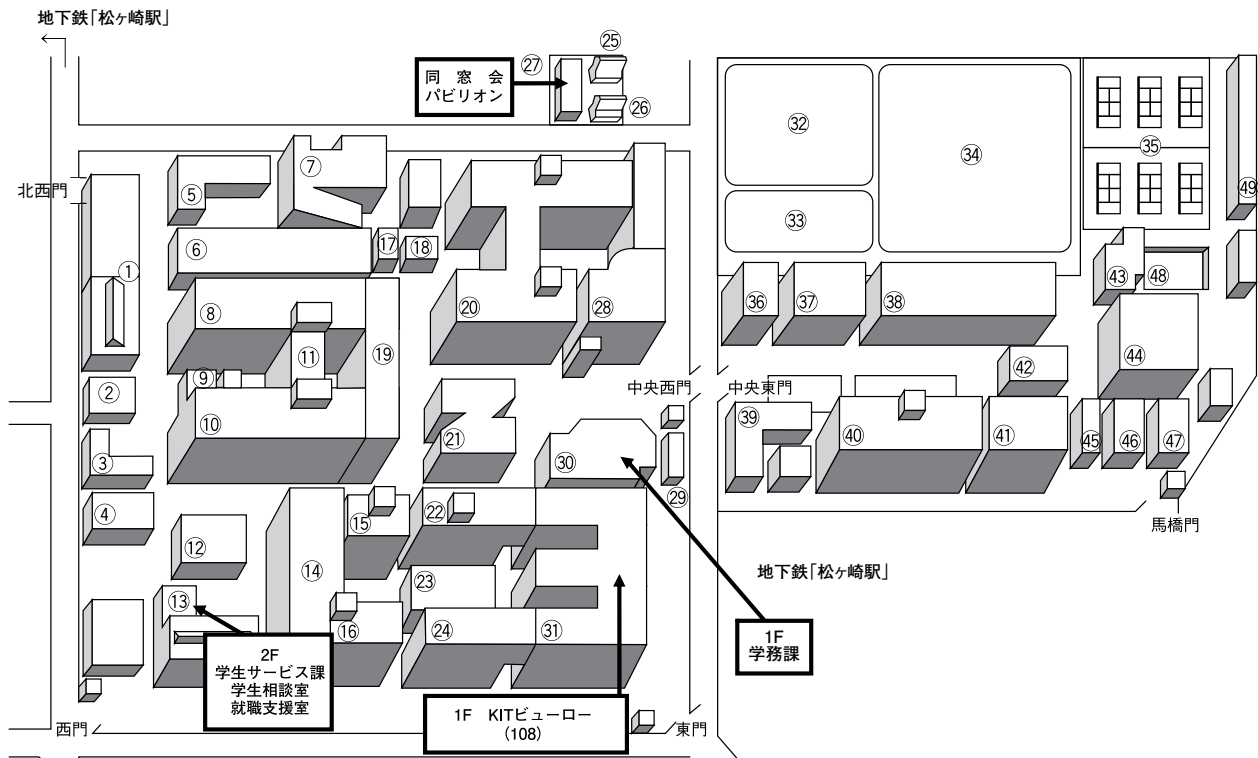
す。 今回の表紙デザインは、本学を感じる「テキストチャー」で構成いたしました。

どうぞ、同窓会誌「工織」をお手元に、読んで感じていただくと幸いです。

デザイン学部門准教授 西村雅信

(意匠工芸学科 昭和59年卒)

■ 松ヶ崎キャンパス建物配置図



1. 創造連携センター(北棟・南棟)
2. 西部講義室
3. 造形工房
4. 課外活動施設
5. 実験実習棟
6. 実習棟
7. ベンチャーラボラトリー
8. 12号館
9. 環境科学センター
10. 10号館
11. 11号館
12. KIT HOUSE(学生食堂)
13. 大会館
14. 8号館
15. 7号館
16. 6号館
17. 廃棄物集積場

18. アイソトープセンター
19. 総合研究棟
20. 2号館(北棟・南棟)
21. 美術工芸資料館
22. 5号館
23. 情報科学センター
24. プロジェクトセンター(4号館)
25. 工織会館
26. KIT 倶楽部
27. 同窓会パビリオン
28. 1号館
29. プラザKIT
30. センターホール
31. 3号館
32. 北駐車場
33. バイク駐輪場
34. グラウンド

35. テニスコート
36. ノートルダム館
37. 本部棟(事務局)
38. 附属図書館
39. 60周年記念館
40. 東1号館
41. 東2号館
42. 健康管理センター
43. 文化系サークル共同利用施設
44. 体育館
45. 東部講義室
46. 武道場
47. 武道場・トレーニング室
48. プール
49. 体育器具庫

2

0

1

3

京都工芸繊維大学同窓会 KIT同窓会誌 No.7

平成25年4月発行

発行所: 京都工芸繊維大学同窓会
(略称「KIT同窓会」)

〒606-0956 京都市左京区松ヶ崎鞍馬田町15-1

Tel/Fax: (075)724-7232

e-mail: kit-obog@jim.kit.ac.jp

URL: <http://www.kit-obog.com>

KITビューロー-Tel: (075)724-7971

振替口座: 00960-3-224524

印刷所: 株式会社 北斗プリント

〒606-8540 京都市左京区下鴨高木町38-2

Tel: (075)791-6125

Fax: (075)791-7290